
ゼロ弾きの未恋

藤ノ宮 空雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロ弾きの未恋

【Nコード】

N3940V

【作者名】

藤ノ宮 空雅

【あらすじ】

6年前、麻薬密売の仲間に売られて前科持ちになってしまった祀。通っていた音大は退学処分になり、27歳になった今もろくな仕事にありつけず、ついには昔の仲間を脅迫して金を得る生活を送ることに。

そんな祀の前に麻薬密売の首謀者だった彗が現れる。彗は6年前の事件で死んだはずだった。

どうして生きているのか、何故、今まで音沙汰がなかったのか……。昂ぶる感情のままに彗を殴りつけてしまった祀は、彗が現在も麻薬

を売り捌いていることを知り、報復を恐れて彗を監禁しようとする。
それが更に大きな事態を引き起こしてしまうとは。

* 当方の創作BLサイト「化学反応。」からの転載作品です。

* 2011/08/05 13/14/15話を改稿しました。

* 2011/08/06 14/15話を更に改稿しました。

ようやく納得がいったので、これにてホンママものの完結です。ありがとうございます！

01（前書き）

この作品は、微弱にはございますがB・L描写を含みます。ご理解頂きますよう、よろしくお願い致します。

思えばあの時、囚われたのだろう。

ソイツは俺が奏でる音をこう評した。

「故郷の声がする」

何気ない、何の意味も持たない、独白。

しかし、それはあまりにも

セロ弾きの未恋

「いいか、二度と現れるな」

念押すように言い捨てて足早に立ち去る男の背中を見送る。「おい」と呼び止めてはみたが男が振り返る気配はなく、声を掛けた祀まつりも振り返らないだろうと予測していた。取引の場所を新宿駅から程近い午後7時の喫茶店に指定したのは、暴力沙汰を避ける為でそれは同時に祀の行動も制限する。人目を憚る、違法な取引なのだ。無理に引き止めて警察に通報されたら元も子もない。彼も自分も同じような傷を持つ身だが、彼よりも祀の傷の方が大きくて新しい。

祀は席についたまま、隣接する窓ガラスへと目を向けた。グレーのスーツを纏った彼の背中は駅の方角に向かって遠のいていき、人

ごみに埋もれて次第に見失われてゆく。今すぐ追いかけて呼び止めなければ彼と祀の接点は無くなるだろう。携帯電話の番号は前日から変更されていて、自宅だけでなく実家の住所も知っているが、押しかければ警察に通報される。

今宵の対談で彼はそう明言した。これ以上つきまとうな、こつちにも考えがある、弁護士も用意した…ありきたりではあるが、後ろ盾を持っていない祀を退けるには効果的な手法だった。近頃、次々と同じ方法で？援助？を断られている。もしかすると？被害者？の中で話が回っているのかもしれない。

「繋がってないと思ってたんだけどな」

未練を断ち切るように呟き、見えなくなった灰色の背中からテールブルの上へと視線を戻した。思わずため息が漏れて、おざなりに注文された手つかずのコーヒーに落ちる。まるで恋人に振られたような気分だが、祀は男で彼も男なので彼はもちろん恋人じゃない。彼は祀が音大に通っていた頃の遊び仲間で、求めていたのは愛情ではなく金だ。

彼と知り合ったのは今から9年ほど前。

当時の彼は麻薬の売人仲間だった。

今になって思い返すと、若さゆえの火遊びと呼ぶには少々行き過ぎた商売だった。主軸となって彼らを先導していた祀は、彼らの密告によって前科を背負う身分に叩き落された。大学はクビになり、27歳になった今も定職に就けない。どれだけ必死に働こうとも「薬物使用」の前科を持っているとバレた時点でクビになるし、家を借りるにも一苦労、家賃の支払いが滞ればすぐさま叩き出される。

その都度、新たな職を探し、家を探し。何度も繰り返すうちに自然と恨みが募った。警察の手に落ちたのは自分だけだ。仲間たちはヤクザの報復を恐れて祀を警察に売った。そして自分たちは安穩と、何事もなかったかのように生きている。

だが、わざわざ今の所在を探し出してまで、彼らの平穩を揺らさせるつもりはなかった。

実際に、その平穩を目の当たりにするまでは。

1年ほど前の夏の日。自販機の前に立ち、小銭しか入っていない財布の中を覗いて缶ジュース一本買うかどうかを悩んでいた祀の真横に、背広を着たサラリーマン2人が立った。おそらく勤めている会社の昼休みだったのだろう、同僚だか後輩だかに「奢ってやるよ」と笑顔で話しかけていたソイツは昔の仲間だった。

声の一つでも掛けてくれたなら違ったかもしれない。ソイツは祀の存在に気づいてさえいなかった。やり切れない思いを抱えて後を追ひ、1人になったところで話しかけたら大仰に怯えた態度を取られて、特に何か言ったわけでもないのに1万円札を押し付けられたのだ。

悲しさよりも驚きの方が大きかったように思う。

握り締めていた掌を開いたら、くしゃくしゃになった一万円札が確かに在った。

ああ、なんだ。こんなにも簡単に金が入る。

以来、祀の職業は？脅迫者？になった。

決して美味くはなかったし喉も乾いていなかったが、冷めたコーヒを残さず飲み干してから喫茶店を出た。商談相手がそそくさと退席してしまったので2人分のコーヒ代を支払わされてしまい、雑多な人ごみの中を進む祀の機嫌はすこぶる悪い。

最近の俺は、金の神様に見放されかけているんじゃないだろうか？

有限である顧客を失ったことも相まって、そんな不安が胸中を圧迫する。祀は昔から金と縁遠い生活を送ってきた。

実家はドがつくほどの貧乏だ。それぞれ2人の連れ子を持つ両親が再婚して、新たに増えた2人の弟を合わせると総勢8名になる。サラリーマンの養父、パート勤めの母の収入だけで8人を養うのは無謀で、後先考えずに入籍した両親は2人とも能天気な楽天家だった。

そんな両親に任せられない、と中学時代から一家の家計を取り仕切ってきた祀は、実家と連絡を取らなくなった今でもケチな性分をしている。喫茶店での会計の際に舌打ちが零れ出たのは言うまでも無い。

鬱々とした気分を晴らそうと祀が向かった先は、新宿駅の構内にあるコインロッカー室だった。人目を憚ろうとした思惑どおり、白い蛍光灯に照らされた無機質な空間に人の気配は窺えない。念のため、二列に分かれたコインロッカーの奥側の通路に入って、そこにも人が居ないことを確認してから、壁際に並ぶコインロッカーに背中を預けてジーンズのポケットへと手を伸ばす。

昔の仲間と顔を合わせるのは金の受け渡しが行われる時だけ。祀は今日もキッチンと5万円を受け取っていた。ここを訪れたのはその5万円を財布に仕舞い込むためだ。本当は受け取ったその場で財布の中に移してしまえばいいのだが、それだと何か、脅迫者として

の雰囲気ぐち壊れてしまふ気がして、乱暴に尻ポケットへ突っ込むのが慣習となっている。

今回も通例に沿って剥き出しの紙幣を取り出した。同じく尻ポケットに入れていた財布も取り出し、キッチンと向きを揃えてから札入れの中に仕舞い込む。我ながら脅迫者という身分に相応しくない動作だと思ふし、日常生活においてはそんなに几帳面な方でもないのだが、金の取り扱いだけはちゃんとしないと落ち着かない。おそらくこれは三つ子の魂というやつだろう。

「ふう……」

財布をポケットの中に戻して、悪い方向ではないため息が洩れた。一仕事終えた達成感、とでもいうべきか。手に入れた金を眺めて些か気分も上昇したような気がする。

さて、この後は何をしようか。

祀は携帯電話で時刻を確認し、白い蛍光灯を見上げて考えた。

金は手に入ったが使い道が思いつかない。派手な遊びをしようと思ったこともなかった。貧乏人の根性が染み付いていて昔から酒にも女にも興味がないのだ。学生の時分にもやることがないのなら即座に家へ帰っていた。

だが現在の祀には家がない。恐喝者は何をされるかわからない職である。実家に帰るのは言語道断、家を借りるのも躊躇われた。一人きりになるのは可能な限り、避けた方がいい。

だから祀は普段ネットカフェで寝泊りしているのだが現在の時刻はまだ8時前だ。お得なナイトパックが開始されるまでは結構な時間がある。さりとて街をぶらつくこうにも今日は冬の再来かと思われるほどに寒い。

4月を幾日か過ぎ、春の陽気が訪れた昨今、冬物のジャケットは新宿からだいぶん離れた街の月極コインロッカーに預けてある。現在の祀の服装は茶色のロングTシャツに薄手のパーカーを羽織っただけで、屋内にいる今も身を竦めなくなるほどの寒さだ。

「そっぴゃ、腹へったな……」

口に出して認めた途端、強烈な空腹感が襲ってきた。考えてみると昼から何も口にしていない。

ちよūdといい、駅周辺の繁華街で適当に店を見繕うことにしよう。そんな風に考えて、コインロッカー室の出入り口に足を向けようとしたのだが、

「もしもし？ 何やってたの。電波の届かないところにおられたの？ それとも電源切らなきゃいけないような展開に陥ってたの？ 俺、充電怠らないでねって言ったよね」

ふと聴こえてきた声に足を止めた。部屋の中央にそびえ立つコインロッカーの向こう側で、おそらく電話しているのだろう、男が一方的に喋っている。

「……地下鉄？ なんてそんな物珍しい交通機関使ってるの？……言ってるけど。そこでタクシーっていう選択肢を選ばないのが不思議。タク代ケチるような立場じゃないよね。っていうか周りの人に迷惑だからタク使つてよ。通報されたらどうするの？」

男は楽しげにクスクスと笑い声を立てた。通報とは物騒な物言いだが物の喻えなのだろう、男の声には危機感というものがまったく感じ取れない。通話相手がよほど好ましい相手なのだろうか？ かなり浮かれた様子である。

「まあそれは確かにね。さすがに下々の面子にも知れ渡ってきてるだろうし。あ、でも帰りはタクにしてね……俺の体調面はおいといて。持つてる物が物だから……バカなの？……違うに決まってる……ねえ、なんでそういう心配しか出来ないの？ 脳髓まで腐食してるの？……ああ、うん……でもさあ、しょうがないじゃない。治るものでもないし……あー……うん……まあ、そう言うならいいけど」
何を言われたのか、声は語尾に至るにつれて拗ねたようになり、それ以降、声はまったく聞こえてこない。代わりにガタンと扉を開ける音が響いた。

中途半端な終わり方だが通話は終わったようだ。ならば早々に荷物を引き取って、この場から立ち去って欲しい。出入り口へは男の

いる通路を横切っていかねばならない。祀は先ほどから出入り口に足を向けて通路の中央に佇んだままだ。何の物音も立てていないので、男は祀が同席していることに気づいていないだろう。

別段、立ち聞きするつもりはなかったのだが、犯罪行為で得た金を仕舞いこんだ直後の来訪者である。ついつい人目を憚って、脱するタイミングを逃しているうちに全て会話を聞き届けてしまった。意図せずとも盗み聞きになってしまったので余計に姿を現しにくいきつと印象に残るだろう。犯罪者という自覚を常日頃から持っている祀はなるべくなら顔を覚えられなくなかった。

だが、そんな願いは予想を覆す形で叶えられない。

「ねえ、電話なんだから喋ってよ」

かなりの沈黙があつたにも関わらず未だに通話は続いていたらしい。ヒツ、と小さく息を呑んだ。

心臓を荒げた祀の耳には大きく聞こえたが、幸いなことに通話中の彼の耳には届かなかつたようだ。荷物を床に置くゴトリという物音の後に「ふふっ」と鼻を鳴らす音が続いて、からかうような口調で相手の言葉を誘っている。

「何でもいいよ。今日、誰と呑んだとか、何話したとか。なんで？ 公の場所じゃ言えない話題？ それともまるつきり無駄話？ それってサボリって言うんだよ。知ってた？」

小ばかにしたような口調だが厭らしくない。むしろそれが彼にとつての自然体であるような。けれど何故、そう思うのか。

祀は、白いタイルの床に伸びる自身の影を見下ろして、眉根を寄せた。

何かが釈然としない。何か忘れているような。懐かしい何かだ。この感覚は。そう、デジャヴという単語がしっくりくる。どこかでこの声を聴いたことがあるはずだ。思い返してみればそうだ、だからこそ通話が始まった時点でこの人物が浮かれていることに気づいたのではないか。

誰だったか。昔の知り合いだろうか。声だけで思い出すのは難し

い。姿を見れば思い出すかもしれない。考えて、足を踏み出そうとした瞬間、

「聞いてるとね、故郷を思い出すから」

柔らかく、慈しむような口調で紡がれた言葉に、身体が強張った。

知っている。忘れるはずがない。今と同じような質感で反響する声が、今とは違う口調で似たようなことを言った。祀が脅迫者の立場におかれることになった、その要因を作った人物の声だ。

すなわち9年前、祀を麻薬売買の道へと誘った人物。

しかし彼は6年前にヤクザに襲われて死んだはずだった。その事実があつたからこそ、仲間たちは飛び火を恐れて祀を警察に売り渡したのだ。警察が介入すればヤクザも手出ししにくくなるだろう、という安易な目論見を持つて。

結果的にその目論見は功を制したようだが、祀には十二分に飛び火した。マトモな人生を歩む道は完膚なきまでに燃え尽されてしまった。

幸いだっただのは服役を免れたことだけだ。友人のツテで紹介された弁護士が優秀で、下された罪状が個人での使用目的のみの「単所持」、売人としての罪には問われなかった。

それでも失ったものは大きい。彼が生きていたのならば、真っ先に彼を責めていた。死んでいたからこそ納得できた。死よりも重い償いは存在しないと。

それなのに彼は生きている。

生きていたのなら何故。連絡の一つも寄越さなかった？

様々な感情が目まぐるしく飛び交う。彼が生きていて嬉しいのか、憎んでいるのか、真逆の感情であるはずの2つすら定まらない。胸が詰まるとはこのことを言うのだろう。身の回りの酸素が急速に失われたかのように息苦しくて、無意識のうちにパーカーの胸元を握り締めていた。

「たまには、こういうのもいいんじゃない？」

もう一度、穏やかな声が響いた。一度も聞いたことの無い声音だ。よほど通話相手を信用しているのか。

祀の知る彼は誰を相手にしても、こんな風に語りかけることなどなかった。もっと冷酷で人を商売道具としか思っていないような人種だった。

「じゃあね。待つてるから早く来てね」

少し早口で言い切つて衣擦れと足音が続く。言い慣れていないことがよくわかる。照れたような、けれど満ち足りた口調だった。

幸せに暮らしているのか。

あれほど人を巻き込んで、麻薬を売り捌いて、色んな人間を不幸のどん底に陥れたくせに。何も知らないフリをして咎められることなく生き長らえている。自分よりも深い罪を背負っているはずなのに。

思つた途端、見えない手に背中を押された気がした。スルリと一歩、また一歩と足が進む。どうしたいのか、何をしようとしているのか見当がつかないまま、それでも進むスピードは上がっていった。

あつと言つ間に通路の端に辿り着いて、出入り口への道が開ける。

質の良さそうなベージュ色のコートが見えた。足元はスラックスと革靴を履いていた。ゴルフバックのような、縦長のバッグを肩に下げており、髪は短く黒い。まるでサラリーマンそのものだ。昔の面影は微塵も残されていない。

けれど、振り返つた横顔は彼だった。

山崎 隼 祀の人生を大きく狂わせた、高校時代からの親友だった。

彗は祀にチラリと視線をやっただけで立ち去ろうとした。

「おい、待てよ！」

慌てて呼び止めると再度振り返り、辺りを見回してから、おずおずという様子で「あの、俺に何か用事でも？」と訊ねてきた。

人違いだったか、と疑いたくなるような見事な擬態だ。彗は身体ごと振り向き、確かに祀を見ているはずなのに、その血色の悪い顔には驚きも焦りもなく純粋な戸惑いだけがある。

だが祀は自分の目を疑わなかった。

「お前、何言ってんだ。彗だろ。山崎 彗」

久しぶりに名を呼び、些かうるたえながら近づいた。

彗の態度にうるたえたのではなく、名を呼んだことにうるたえただの。

呼んでみて気付いた。祀は6年前から一度も彗の名を口にしていなかった。恐喝の最中、話題に上っても「アイツ」呼ばわりで、それとなく名を呼ぶことを避けていた。それどころか話題自体も避けていたかもしれない。

彗の名を持ち出して恐喝するのは、なんとなく嫌だった。

ああ、そうだ。死んでまで悪い噂を広げたくないってくらいには、彗のことを大事に思っていた。

広がりかけていた負の感情が身を潜めた。彗は別に自分に責任を押し付けたわけじゃない。ヤクザに名指しされて、追われて、首謀者らしく一番割を食ったのだ。生きていてよかったじゃないか。

祀はふ、と身体力を抜き、歪ながらに笑みを浮かべた。まだ緊張の余韻が残っているものの、なるべく気さくな口調で語りかける。

「なあ、お前、今、何やってんだよ」

彗は答えを寄越さなかった。名を呼んだ時もそうだ。見つかった都合が悪い、という雰囲気ですらない。あくまで「見知らぬ人間に声を掛けられて、どうしたらいいかわからない」という態度を貫いている。

それでも祀は諦めなかった。彗は人を騙すことに長けた男だ。これくらいの演技は日常茶飯事でやってのける。簡単に騙されるほどの浅い付き合いではない。

祀は腰を曲げ、彗を下から見上げるようにして、更に近づいた。

「死んだことにしてんだろ？ 心配しなくても誰にも言わないってそんなくらい、わかってる。お前、色んなトコから恨み買ってるもん。偽造戸籍もいっぱい持ってんだろ？ 一つ、一個ぐらい死んでもどっつてことなさそう……って、まあ、どうってことないってことはねえだろうけどさ。何にしても、ほら、元気でよかった……」

「触るな」

笑顔で伸ばした手が振り払われた。

「っ、なんだよ！」

「それはコッチのセリフ。何、あんた。俺はあんたのことなんか知らない」

拒絶に満ちた口調と態度だった。彗は肩に掛けた荷物の紐をぎゅっと握り締めて、出入り口に向けてジリジリと後退していく。

何が癢に障ったのか。さすがに祀も困惑した。騙そうとしているにしたって、この態度はおかしい。

彗は見た目どおり、荒事向きでない。「他人の空似だ」とシラを切り通すならともかく、こんな風に敵意を剥き出しにして追い払おうとするとは思えない。ましてや祀は別に何も、乱暴な真似をしていないのだ。

「なあ、何かあったのか？」

祀は心配げに尋ねた。

「俺に何かあっても、あんたには関係ない」

「その、さあ……あんたつつーの、やめろよ。まさか俺の名前、忘

れたとか言わねえよな？ 言いそつだから先に名乗っとくけど……」

「聞く必要もない。どっか行つて」

取り付く島もない。どれだけ友好的に話しかけても彗の態度は一向に緩まず、それどころか悪化している。

心配や怒りを通り越して、悲しくなってきた。何故、自分はここまで邪険にされなければならないのだろうか？

高校時代の祀と彗の仲は、周りから親友と呼ばれるほどに良かった。

優等生だがサボリ魔だった彗は屋上を寢床にしてい、音大進学を目指して勤労学生をやっていた祀とよく鉢合わせた。初めに声を掛けてきたのは彗で懐いてきたのも彗だ。

信用されている、信頼されていると思っていた。だからこそ麻薬の密売に誘われたのだと思っていた。それなのに。

「……いいや。わかった。そんなに嫌なら立ち去つてやるよ」

胸が痛い。悲しくて仕方がない。けれど、それを見せるのも癪でぶつきらぼつに言い放った。

パーカーのポケットに手をつ込んだまま、彗の隣を抜けてロッカー室を後にしようとして、

「……？」

彗が奇妙な行動をした。

祀を見送るように身体を反転させたのだ。

背後を取られるのが嫌なのか。いや、そこまで警戒しているなら会話が始まった時点でロッカー室から逃げ出しているだろう。サラリーマン風の容姿をした彗と、いかにもフリーターといった祀が争っていたら、どちらが悪者かなど一目瞭然だ。警察を呼ばれたところで彗に不都合は発生しない。

祀は出入り口の境目で足を止めて、改めて彗の様子を観察してみた。

「まだ用があるの？」

警戒は一切解けていない。そして、よくよく見てみると尋常じゃないほど左手に力が込められている。肩に下げた荷物の紐を握った手だ。

この荷物に、何か隠されている。

「なあ、それ、何が入ってんの」

直感して、慧の左肩を顎でしゃくりながら聞いた。サラリーマンが持つには少し違和感がある、黒い縦長のバッグ。もしかすると警察に見咎められるような何かが入っているのではないだろうか？

なんだろう、と考えながら慧の肩を覗き込む。

すると、慧は口元を歪めて、狡猾そうな、されども笑い損なった顔で、

「さあ？ 君には必要ないものだと思うけど？」
と、首を傾げた。

豹変と呼ぶにふさわしい態度の変化だった。サラリーマンはこんな顔で笑ったりしない。酷く陰湿で、人を見下した 慧らしい笑みだ。

記憶の中にある慧の笑いと今、目の前にある笑みが重なる。

慧は自身が仕入れてきた麻薬を見て、それを買う客や売り上げを眺めて、よくこんな笑みを浮かべていた。

『面白いくらい、売れるね』

そう言って、あっさりと興味を失い、決まって祀に演奏を強請った。

金よりも、何よりも、優遇されていた。

まるで中毒者のような顔でチェロの音を聴く。

「俺、チェロ弾くの、やめたんだ」

支離滅裂な会話だった。慧が本当に慧本人だとしても脈絡が無さすぎた。

けれど伝えたかったのだ。

伝えて、嘆いて欲しかった。

しかし慧は笑みを貼り付けたまま、言う。

「ねえ、どうしたの。言ってることが変。麻薬でもやってるの？」

瞬間　目の前が真っ赤に染まって身体が動いた。

自分でも驚くほどの早さで慧の胸倉を掴み、呆けた顔を殴り飛ばす。

人を殴る感触は久しぶりで何だか現実味がない。殴った勢いで白いYシャツの襟元から指が離れ、慧の身体はガシャンという大きな音を伴ってロッカーにぶつかり、薄汚れた床に落ちた。

横倒しになった身体から小さく呻きが聞こえる。もぞりと腕が動いて黒いバッグを抱え込むのが見えた。

そうして　そのまま動かない。

祀は肩を怒らせて、掌に爪が食い込むほどに力強く拳を握り締めたまま、慧を睨み下ろしていた。心臓がバクバクと音を立てていて耳元も同じように騒がしい。全身が心臓になったかのように、足の先まで血液の走る感覚が感じ取れる。

どのくらい、そうしていたのだろう？

感覚を阻害するかのような、細かい震えを感じた。

「……電話」

ジーンズのポケットに入れていた祀の携帯電話だ。誰かが電話を掛けてきたらしい。無粋なまでに規則正しい振動が太腿の辺りに広がっている。

祀は携帯電話を取り出し、着信相手の名前と床に倒れている彗を交互に見比べてから電話に出た。

「もしもし？」

「せ、先輩。あの、三池です」

受話器からオドオドと怯えた声が聞こえてくる。

「知ってる。番号登録してっから」

祀は彗の傍らにしゃがみ込みながら応じた。

三池は高校の後輩で恐喝相手の一人だ。つまり、6年前まで麻薬を売っていた仲間で、彗とも直接の面識がある。

「う、ごめんなさい」

すぐさま、聞こえてきた謝罪に眉根が寄る。

「何が悪いか、わかって謝ってんのか？」

「え、あ、その、先輩、機嫌悪いから……」

消え入りそうになる三池の声に、ため息が漏れた。祀が脅迫を始める以前、高校時代から三池はこの有様だ。いじめられることに慣れていて、理不尽な要求にも抵抗しない。出会った当初からして、そうだった。同級生に金をせびられているところを助けてやったのだ。

以来、三池は祀の言うことに絶対服従で、どんなことを言っても逆らわない。わざわざ脅迫せずとも、簡単に金をせびり取れそうだが、そうすると自分が完全な悪者になってしまう気がする。

祀は好んで悪の道を歩いているわけではない。真つ当な道が無くなってしまうただけだ。

だから、これは正当な権利だ。

自分に言い聞かせるように思い、携帯電話を耳に押し当てたまま、彗の顔を眺める。彗は安らかといってもいいような顔で気を失っていた。これは擬態ではないだろう。高そうなベージュ色のコートに包まれた腕　よく見ると右手の指が3本、失われている　を、持ち上げると、抱えられていた黒いバッグが床に落ちた。

彗が身を呈してでも守ろうとしたバッグ。金にさえ執着心を抱かない彗が大切にしている物は一つしかない。

おそらく中身は麻薬だ。彗は今も麻薬を売り捌いていて、莫大な利益を手に入れている。加えて、彗の性格を踏まえると祀にできることは一つしかなくなる。

このまま彗を誘拐して、脅迫できるような弱みを握る。

巻き込んだ後に事情を話せば、三池も自ら進んで協力してくれるだろう。頭の中で算段をつけながら指示を出す。

「ミケ。お前、今、どこにいる？」

「え、はい、あの、運転してます」

「どこにいるのか、聞いてんだけど……まあ、いいよ。その車で俺を迎えに来い。運んでもらいたいモンがあるんだ」

30分後に落ち合う約束を取り付けて、電話を切り、祀は即座に次の行動に移った。

入り口から近い、この位置では人目についてしまう。彗の身体をロッカー室の奥に引きずって行って、ふと周りを見回した。監視カメラらしき物はどこにもない。

あとは駐車場まで運ぶ方法だ。

祀はしばらく考えて、三池にメールを打った。

ダンボールとガムテープ、そして台車を買ってこい。できるだけ大きな、けれど台車に乗せられるくらいの大きさがいい。例えば、大人の男を梱包できるくらいの。

送信から間を置かず、了承の返事が返ってきた。もちろん疑問は抱いただろうが、三池に祀を問い質するような根性はない。それを理解した上でのメールだった。

「他に、なんかあったっけ……」

パチン、と携帯電話を折り畳んで、染みの浮いた天井を眺めた。足元には相変わらず気を失ったままの慧が、壁とコインロッカーに凭れ掛かって座っている。改めて、じっくりと観察してみたがピクリとも動かない。この場所に引きずってきた時にも、うめき声一つ上げなかった。

あんな風に殴ってしまったって、平気だろうか？

一見すると健康体に見える慧だが、実は日常生活に支障をきたすほど身体が弱い。詳しい事情は知らないが、走ることすらもままならないようで、体育の授業は常に見学だった。

しゃがみこんで、真正面から慧の顔を眺めてみる。

昔と変わらず、血色の悪い顔だが問題はなさそうだ。寝息のような、規則正しい呼吸をしている。殴った時に切れたのだろう、唇の端が赤く滲んでいるのが、妙に痛々しい。

何故だか申し訳ないような気分になって、そんな自分に納得できなかった。殴りつけた時の激情も、とつくの昔に失せてしまっている。

そもそも、あんな言葉一つで暴力を振るってしまったことが意外だった。6人兄弟の長男である祀は、自制することに長けている。

どれだけの暴言を浴びせかけられようと、年の離れた弟たちに暴力は振るえない。自分より弱い、という点では慧も弟たちと同じだ。

そうか。だから、こんな気分になってるのか。

どこことなく腑に落ちない気もするが、無理やり納得することにした。考えても、どうにもならない問題だ。殴ってしまった以上、祀は慧を脅すしかない。

「お前、絶対、報復してくるもんな」

しゃがんだ膝の上に頬杖をついて、無防備な寝顔を晒している慧

へと語りかけた。声には苦渋が滲み出ている。とりあえずの算段は立てたが、先のことを考えると気が重い。

三池からの電話で我に返り、気がついたことだ。

彗は自分に害を及ぼすものに対して、血も涙もない非情な報復をする。古くからの知人だろうが、魔が差しただけの突発的な行為であろうが関係ない。一度でも敵と認識されたら終わりだ。間違いなく人生が破滅する。

今の祀を破滅させる手段は、素人でも考え付く。ましてや相手は彗だ。弱冠21歳で、警察もヤクザも欺き、都内に新種の麻薬を蔓延させた裏社会の申し子である。どんな報復をしてくるか、想像するだけで憂鬱になってくる。

「……頼むから、おとなしく脅迫されてくれよ」

叶いそうもない願いだ。口にして、より一層、気分が沈んでいくのがわかる。せめて彗を脅して、多額の金が入ればいいのだが。

1時間後、祀は車の助手席で頭を悩ませていた。

コインロッカー室で立てた計画に狂いはない。三池は30分ほどで現れたし、彗の運搬に必要な道具も揃えていた。彗は終始気を失ったままで、ダンボールの中に入れて、台車で駐車場まで運ぶ際にも一切の抵抗を見せなかった。

三池の協力も上手く取りつけた。どうやら三池は彗を敵に回す恐ろしさを祀よりも知っているようだ。事情を知り、当初はうるたえていたが、次第に落ち着きを取り戻し、最終的に脅迫するまでもなく、自ら協力を願い出てくれた。

運搬だけでなく、都内の一等地に建つ実家を彗の監禁場所として使わせてくれるらしい。三池家は都内でも有数の不動産会社を営んでいる、超がつくほどの金持ちだ。家人の目に留まらず、自由に使える部屋があるのだろう。願ってもない申し出に、祀はすぐさま頷いた。

三池が何か企んでいる、というわけでもない。祀と三池の関係は、脅迫者と被害者になつてからも良好だ。三池は何故だか、異様なほど祀に懐いている。最初に脅迫した時も「5万でいいんですか？」と逆に聞き返されたくらいだ。

それに祀は現在、ダンボールの中に梱包した彗を、後部座席に乗せて三池の実家に向かっている。車を運転しているのも三池だ。既に立派な共犯者と言えるだろう。彗が目覚めたら確実に標的にされる。そんなリスクを背負ってまで祀をハメるとは到底、思えない。

では、何に頭を悩ませているのか。

まず、彗の現在の職業が問題だった。

「ミケ、本当に間違いないのか？」

祀は指先で摘んだ名刺に、険しい眼差しを向けて問いかけた。都会の大通りを走る車の中は夜間であっても、さほど暗くない。名刺

の文字くらいは容易に読み取れる。

名刺には？東郷建設・資材調達部 上野 慧？と記されている。
慧の懐から拝借した物だ。

「東郷建設、ですよ。それだったら合ってます。上野っていう人のことは知らないですけど……でも、本人だと思います。免許証と同じ名前だし、名刺、たくさん持ってたし」

三池は両手でハンドルを握り、前を向いたまま答えた。運転中だからだろうか？ こんな状況でありながらも、普段より堂々として
いる気がする。

「なんで、そんなに落ち着いてられるんだ？」

逃げないで協力してくれるのはありがたいが、理解しかねる心理だ。普段からこの胆力を発揮すれば女にもモテるだろうに、と三池の整った横顔を眺めて、ため息を吐く。

東郷建設は東郷会の表の顔だ。しかも末端ではなく、本家直営の企業であるらしい。名刺を見た三池が、顔を引き攣らせながら説明してくれた。三池は親の事業である不動産会社の経営を手伝っており、建設会社にも詳しい。

東郷会の説明もしてくれようとしたが、必要ないので断った。既に知っている情報だったからだ。

東郷会は関東で一番、名の売れている広域指定暴力団だ。裏社会と何ら関わりのない一般人でも知っている。ニュースや新聞で暴力団という単語が出ると、ほとんどの場合、冒頭に東郷会系、という文言が付く。それほど強大な勢力だ。

慧はそんな組織と関わっている。名前が違っても本人に間違いはない。三池が言っていたとおり、慧の財布から出てきた上野 慧の免許証には、慧の顔写真が添付されていた。

樂觀的に考えても、慧は東郷会に麻薬を斡旋している。もしくは東郷会の一員になっている。どちらにせよ、ヤクザ関係者に手出した祀の行く先は東京湾の海底だ。

「でも、あの、バッグは置いてきたから」

おずおずといった様子で三池が言った。彗が持っていた黒いバッグのことだ。祀は一抹の希望を持って、あのバッグをロッカー室に置いてきた。

「麻薬さえ手に入ったら、追って来ないと思います」

「まあ、俺もそう思いたい」

思いたい、思えない。まだまだ問題は山積みだ。

そう思ったが口には出さなかった。

ここで三池を怖がらせてしまったら、手を引くと言われたら。突然、心変わりして東郷会に売られたら……、と疑う気持ちばかりが心を占めている。

「……巻き込んで、ごめんな。けど俺、他に頼れるヤツがいらないだ。ミケに頼るしか考えられない」

半分は本心、半分は打算の謝罪だった。いや、半分もないかもしれない。本心からすまないと思っているのなら、行動で示すべきだ。助手席のシートに深く身体を沈めて、この先のことを考えないようになっている時点で、この謝罪は口先だけの甘言に成り下がっている。わかっていながらも沈痛な表情で頭垂れて、申し訳なげな態度を取り続ける自分。

そんな祀の心情を見抜くことができないのだろう。三池は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「先輩が俺を頼るのって、初めてですね。あの、俺、頑張ります。なんでも言ってください」

邪気のない返答に、なけなしの良心が痛む。

俺は悪くない。悪いのは彗だ。

対向車線を走る車のライトが射し込む度に、見たくない心の影を見せつけられるような気がして、祀は何度も自分に言い聞かせた。

祀と三池は高校からの付き合いだ。知り合ってから毎日のように顔を合わせていたが、学区が違ったこともあり、祀が三池の家を訪ねることはなく、三池も祀を実家に招くことはなかった。今、今になるまで祀は三池の実家を見たことがなかった。

三池の家は、まさに豪邸だった。

リモコンで操作できる立派な門。奥に見える住居はモデルルームのように真っ白だ。贅沢とは程遠い生活をしてきた祀にも、金がかかっているとわかるような洒落たデザインをしていて、都会の真っ只中に建っているのに緑に囲まれている。

祀は助手席の窓に鼻先を突きつけて、まじまじと三池家の中を観察していた。とても日本だとは思えない光景だ。門を抜けた車は舗装された道路。道すがらに外灯が2つ設置されていた。を走り、屋敷の地下へと続くスロープを降りていく。スロープはシャッターで閉ざされていて、これも門と同じくリモコン操作で開いた。

スロープを降りた先は駐車スペースになっており、ここに至ってはリモコンすら使わずに照明が点いた。三池は平然とした表情でハンドルを回し、車を車庫に入れている。ここで暮らしているのだから、慣れていて当然だとは思うが、慣れていることが腹立たしい。

「楽して生きてたら肥えるぞ」

祀は口先を尖らせて、厭味を吐いた。

厭味だとも思っていない様子で、三池があっさりと応じる。

「ジムで運動してるから平気です」

「税金、納めてんだから公道を走れって」

「あ、そうですね」

素直に頷いた三池に憤りすら通り過ぎて呆れてしまった。所詮、金持ちに何を言っても無駄なのかもしれない。

シートベルトを外し、先に車を降りる。三池が慌てた様子で「こ、

「ごめんなさい」と言ってきたが、取り繕う気にはならなかった。

三池は恵まれている。家柄だけでなく外見にしてもそうだ。三池の母親は昔、女優だったと聞いた。血が繋がっているだけあって三池の顔も整っており、当人が言っていたようにジムで鍛えているのだろ。元々、180センチ近い身長に加え、引き締まった身体つきをしていて、サラリーマンが着ていたら笑ってしまいそうな三つ揃えの茶色いスーツがよく似合っている。まるで月9ドラマに出てくる若手俳優のようだ。

「あの、山崎先輩も、降ろしますよね？」

「ああ」

祀が頷くと、三池は自主的に後部座席を開けて、台車を引き出した。当然といえば当然だが、ここでダンボールを開封する気はないらしい。続けて、後部座席から引き出したダンボールを台車の上に載せて、祀に笑顔を向けてきた。

「先輩、できました。行きましょう」

「ちよつと待て。お前、なんて説明するんだ？」

「誰に、何をですか？」

三池はキョトンと目を丸くして問い返してきた。状況がわかっていいるのだろうか？ 暢気な態度にため息が零れる。

「ここはお前の実家なんだから、親に色々聞かれるだろ。俺は高校の先輩でいいけど、ダンボールの中身はどう説明するんだ？ 口裏合わせしとかないとボロが出るぞ」

祀はダンボールに視線を落とし、抱いた懸念を説明した。

三池の両親がどんな人柄かは知らないが、スーツも着ていない、あからさまにサラリーマンではなさそうな男とダンボールを伴っての帰宅である。何も聞かない方が不自然だ。

しかし三池は首を横に振った。

「お父さんとお母さんは海外旅行中です。前沢さんは事情を説明したら協力してくれると思うんで、安心してください」

唐突に出てきた名前に祀は顔を曇らせた。前沢 聞き覚えのな

い名前だ。

三池は祀の表情に躊躇うこともなく、屋敷の入り口へと台車を押し始めている。

「おい、前沢って誰だよ。俺は知らないぞ」

慌てて、三池の肩を掴んで引き止めた。少し乱暴になってしまったが仕方がない。記憶を探っても、やはり前沢という知り合いは見つけられなかった。見知らぬ人間に事情を説明すると聞いて、心中穏やかでいられるはずがない。

「お父さんが連れてきた執事さんです」

三池は振り返らないまま、足を止めて答えた。聞きなれない単語に眉間の皺が深まる。

「執事？」

「ご飯を作ったり、掃除や洗濯をしてくれるんです」

「家政婦みたいなもんか」

三池が「はい」と頷く。腑に落ちないながらも、祀は納得して三池の肩を放した。家政婦ということは、きっと前沢は昼勤めなのだろう。三池とて、素直に「ヤクザ関係者を殴って拉致監禁するから手伝ってくれ」と訴えるほどバカじゃない。時間を置いて、口裏を合わせてから協力を求めるのなら、祀も三池の意見に賛成だった。

前沢が家のことを取り仕切っているからだ。祀はしばらくの間、替と共に三池家の世話になるつもりでいる。間抜けな話だが人は生きていく限り、腹が減る。1人ならまだしも、2人分の食料を誤魔化すのはさすがに難しい。三池に買って来させるにしても、そのうちバレル。

「飯って、用意してあるのか？」

祀は胃の辺りを擦りながら、三池の隣に並んで歩いた。

地下駐車場から屋敷の内部に入ったが、土足のままだ。けれど抵抗はなかった。三池家の廊下は白いタイルが敷き詰められていて、土足で家に行くといいというよりも、ビルの中を歩いている感覚に近い。

「先輩、お腹が減ってるんですか？」

ガラガラと台車を押しながら、三池が問いかけてくる。

「昼から何も食ってない」

祀は天井を見上げて答えた。空調設備や通気口を挟んで、アンティーク調の照明がぶら下がっている。シャンデリアでないところが、持ち主の品の良さを表していた。

「前沢さんが用意してくれてると思います」

「その、前沢ってヤツはどんなヤツなんだ？」

犯罪に手を貸してくれるような人種なのだろうか。それはそれで問題があるような気がする　と、考えていたら、廊下の奥のドアが開いた。

「おかえり、坊ちゃん。ダチを連れてくるなんて珍しいねえ」

ドアから人影が出てくる。この男が前沢、なのだろう。開いたドアはおそらく厨房だ。男がドアを開けた途端、食欲をそそる匂いがフワリと漂ってきた。

だが、これを執事と呼んでいいのだろうか？

祀は眉を顰めて、歩み寄ってきた前沢の姿を眺め回した。いないと思っていた人間が現れたことより、前沢の格好に戸惑いを隠せない。

前沢本体の見栄えは悪くない。年は30代後半、体軀は細く引き締まっていて、バスケット選手のように均整が取れており、顔つきは和み系。開いているのか、閉じているのかわからない糸目、のんびりとした語り口も相まって、人の警戒心を失せさせる。老若男女問わずに好かれそうなタイプだ。

ただし、趣味が悪い。

祀と同じような、いかにも伸ばしっぱなしという長さの髪が首筋にまわりついている。おそらく自分で切っているのだろう、長さがまばらで不恰好だ。それでも不衛生に見えないのは前髪を髪ゴムで括り上げて、額を晒しているおかげか。しかし、そのチョンマゲのせいでバカに見える。

服装に至っては更に悪い。スリッパを履いた素足と穴の開いたジーンズはともかく、サーモンピンクでフリルつきの前掛けと、黄色の生地「萌えええ！」と大きな黒字で書かれたＴシャツはいかなものか。

啞然としている祀の前で、三池と前沢は談笑している。その様子から、前沢が普段からこの格好をしていると窺い知れて、余計に困惑が深まった。

「あの、先輩。この人が、さっき言ってた前沢さんです。前沢さん、この人は高校の先輩で……」

「品川 祀っす。世話になります」

その服装の趣味はどうかと思うっす、と心の中で付け加えて、祀は頭を下げた。前沢も同じように「前沢です」と言って頭を下げてくる。格好は奇抜だが、執事と呼ばれるだけのことはある。頭を下げられた祀の方が恐縮してしまうような、折り目正しいお辞儀の仕方だった。

その動作に釣られて、背筋を伸ばした祀に気づいたのか、顔を上げた前沢は和やかに言い募ってきた。

「と、挨拶も済んだことだし、堅っ苦しいのはナシにしよう。で、さっそく聞きたいことがある。さっきから気になってるんだけど、ソレはなんだい？」

前沢の言葉とは裏腹に、余計に緊張が高まった。ピシリ、と顔が強張る。自然に振舞わねば、と思うものの、頬の力が抜けずに言葉も出てこない。

前沢が指を指したのは、台車に載せられたダンボールだった。予想外の遭遇とはいえ、三池が言っていたとおり、祀も同意したとおり、事情を説明して協力を仰がねばならない。

だが、前沢はあんな風に礼儀正しい人物なのだ。相応の常識を持っているだろう。常識人は拉致監禁に協力したりしない。「協力してはいけない」と三池を諭し、警察へ通報するに決まっている。

言葉の出てこない祀を氣遣ったのか、三池がおずおずと口を開く。

代わりに事情を説明するつもりなのだろう。

「えっと、コレは、その……」

マズイ。咄嗟にそう思い、祀は三池の言葉を遮った。

「俺、すっげえ腹が減ってるんで！」

前沢の糸目がつつすらと開く。話の腰をへし折った祀の言葉に驚き、何やら裏がある、と感じたらしい。前沢はすぐに元の糸目に戻り、今度は訝しげな様子で腕を組んだ。

「いきなりだねえ。どうかしたのかい？」

相変わらず、のんびりとした口調だが問い質されている気がした。被害妄想だ、まだ気づかれていない、と思いながらも上手い返答が見つからない。これなら素直に事情を説明した方がまだマシだった、と思えども既に遅い。どうにかならないか、と隣に佇む三池に視線をやったが、三池も困惑しているようだ。フォローは期待できまい。仕方ない。祀は更に、空腹を訴えることにした。

「昼から何も食ってなくて……いい匂いしてきたから、すっげえ、急激に腹減ってきたんすよ。それで、なんつか、いきなりで悪いんすけど、飯食いたいって」

頬を搔いて、所在なげな体を装う。必死で「つい、言葉が口を突いてしまった」という演技をした。頭の中では、どうしよう、という単語が渦巻いている。どうしよう、どうしよう、それだけだ。他の言葉はまったく浮かばない。

こんな有様で、この先やっていけるんだろうか？

不安と、自分をじつと観察している前沢の視線から逃げるように顔を俯けた。警察の取調べ室と、東京湾に沈む自分が脳裏に浮かぶ。本来なら相反するはずの災厄、考えうる限りの最悪が詰め込まれた情景だ。自然と表情は曇る。

しばらくの沈黙があった。そして、ため息。

「いいよ」

声もため息も前方から聞こえてきた。顔を上げると、組んだ腕を解いた前沢が、廊下の先、厨房の隣にあるドアを親指で示して苦笑

していた。

「リビングで待つてなよ。坊ちゃんはどうする？」

「あ、俺は食べてきたので……」

「じゃあ、祀くんだけでいいね。 Pastaでいいかい？」

問われて、にべもなく頷いた。渡りに船だ。これで言い訳を考えられる。三池と口裏を合わせて、せめて自分に非がないよう、取り繕わなければ。

決意も新たに立ち去っていく前沢の背中を見る。

だが、前面と同じ黒字で「萌えに敵はなし！」と書かれていて気が抜けた。安堵の気持ちも相まって、本当に空いていた腹がググウ、と音を鳴らす。それを聞いた三池が「先輩、よっぽどお腹が空いてたんですね」と暢気に言うものだから、

「お前はいいよな。何も考えてなくて」

八つ当たりだと思いつつも、冷たい声音で吐き捨てて、案内されるよりも先にリビングへと向かった。

三池家のリビングは屋敷の大きさに相応しく、15畳はあろうかという広さだった。テレビもソファ어도ダイニングテーブルも、それ相応の大きさで高級感に満ち溢れている。こんな状況でなければ、さぞかし楽しめただろう。

「先輩、コレはどこに置いたらいいですか？」

追いついてきた三池が台車の取っ手を握って聞いてきた。

どこだっていい。半ば投げやりな気持ちで「そこらへんに置いとけ」と命じて、重々しいため息を吐く。

言い訳。取り繕い。どう説明すれば、前沢を納得させられるか。今更、事情を説明せずに隠し通すことは難しい。考えなければならぬ。それも、拉致監禁を正当化させる理由を。

まさか、道端で倒れた友人をダンボールに入れて連れてきた、というわけにもいかない。どの道、彗が目覚めたら、何らかのリアクションを起こす。人を誑かすのが上手い彗が何を言っても、揺らないような理由が必要だ。

ダイニングテーブルに着席して、頭を悩ませてみたが、まったく思い当たらなかった。何せ、最初に暴力を振るったのは祀なのである。過去に麻薬を売らされていた、という言い訳は通用しそうになり。それだと単なる復讐だ。「やめておけ」と諭されるのが関の山そこに彗の甘言が加われれば、前沢はあっけなく屋敷から彗を逃がすだろう。

「先輩、もしかして前沢さんに教えちゃいけないんですか？」

対面に座った三池が困った顔で聞いてくる。

「いや、教えなきゃいけないってのはわかってんだけど、なんつか、心の準備が……」

素直に事情を説明しようとしたことからわかるように、三池は前沢を全面的に信頼しているらしい。「本当に信頼できるのか？」

と問い質すのは悪い気がして茶を濁した。

「口ごもった祀に、三池が笑顔を向けてくる。」

「俺には普通に電話くれたのに」

嬉しくてたまらない、という三池の口調に戸惑った。今まで気に留めることはなかったが、考えてみれば最初から妙だ。

三池は臆病者らしく危険には人一倍、敏感だ。外面はいいが、中身は極悪な彗にも出会った当初から怯えていた。彗の化けの皮が剥がれてからは、まさに蛇に睨まれた蛙の有様で、祀が彗の傍にいないければ決して彗に近寄らなかつたし、会話すら成り立たない。彗に何を言われても、ガクガクと震えるように頷くだけだった。

「……お前、なんでそんなに落ち着いてるんだ？」

「先輩の手助けになれるのが、嬉しいんです」

「何の手助けしてるか、わかつて言ってるのか？」

「はい。山崎先輩を監禁するんですよ」

三池は迷いなく明言した。浮かれた笑顔のままで、だ。

祀はなんだか不気味になってきた。彗のことを抜きにしても、犯罪行為の共犯にさせられたというのに、三池の態度はまるで遠足に行く前日の子供のようだ。これから起こることが楽しみで仕方がない、つまり彗を監禁することが楽しみ、といった様子なのである。

そうだ。ミケは彗をどうするつもりなんだ？

祀は彗を脅迫するつもりでいた。監禁して脅迫材料を聞き出して、解放してやるつもりだった。手荒な手段を使うつもりはない。祀は拷問のやり方など知らないし、彗は身体が弱い。軽く殴っただけで気絶してしまうのだ。「この程度なら大丈夫だろう」と暴力を振るっている内に、誤って殺してしまうかもしれない。人殺しになるのは絶対に嫌だった。

けれど三池の考えは違うのかもしれない。痛い目に遭わせることを楽しみにして浮かれているのかもしれない。三池らしくない、とは思うが、普段、おとなしいヤツほどキレると怖いものだし、三池にだって彗を恨む権利はある。

拷問しようとしているなら、止めなければ。

そう考え、更に追求しようとして、

「おい、ちよいと出てきてほしいんだが」

リビングのドアから声が掛かった。前沢の声だ。両手が塞がっているんだろつか、と祀は返事をして立ち上がった。

金色のドアノブを握り、木製の重厚なドアを開ける。

と、正面にワゴンが見えた。ホテルのルームサービスで使われていそうな銀色のワゴンだ。その上にホカホカと湯気を立てるパスタが載っている。前沢の姿は見えない。

「ああ、こつちだよ、こつち」

開いたドアの向こうから声が聞こえた。

廊下に出て、覗き込むと台車の前に座り込んだ前沢がいた。

「聞きたいんだけども」

サツと血の気が引く。ダンボールの蓋が開いていたのだ。

「この子、誰だい？」

前沢が困った顔で、ダンボールの中を指差して聞いてくる。祀は咄嗟に言い訳が思いつかず、居心地悪そうに顔を背けるしかなかった。

「なるほど。それで坊ちゃんを頼ったのか」

三池の隣に座って、前沢が頷く。

祀は用意されたパスタを腹に収めつつ事情を説明した。前沢にそうしろと命じられたからだ。ガムテープで口と両手を塞がれた替を見られたのだ。もはや誤魔化しようがない。正直に全てを打ち明けるしかなかった。

口裏合わせをしても無駄だっただろう。三池は嘘を吐くのが下手だった。祀が苦し紛れの嘘を吐いても、三池に真実を訊ねられて、すぐにバレてしまった。

話を聞き終えた前沢はしばらく考えて、

「殴った時の時刻を覚えているかい？」

ソファーの上に転がっている彗を眺めながら聞いてきた。

ダンボールに入れられたままでは可哀想だ、と前沢の手でリビン
グに運び込まれた彗は相変わらず目を覚まさない。口に張っておい
たガムテープを剥がした時に少しばかりの反応を見せたが、両眼が
開くことはなかった。そもそも起きていたら、暴れるなり何なりす
るだろう。

「たしか、8時くらいだったと思う」

「じゃあ、3時間くらいか」

前沢がダイニングテーブルから立ち上がり、ソファーの前にしゃ
がみこむ。祀も前沢の後に続き、ソファーの脇に立った。三池もイ
スを鳴らして立ち上がり、祀の隣に並ぶ。

前沢は壁に掛かった時計と彗を見比べて「うーん」と唸った。時
計の針は11時を指している。飯を食ったり、事情を話したりして
いるうちに随分と経っていたようだ。

「殴られて気を失ったんなら、そろそろ起きててもおかしくないん
だけどねえ……」

「あんだ、医者なのか？」

「うんにゃ、単なる素人の体験談」

あつさりと言われて驚いた。だが妙に納得してしまった。体験談
ということは何を気絶させたり、自分が気絶したりするような過去
を持っているということだ。人を和ます糸目にチョンマゲ、萌Ｔシ
ヤツを着ている料理上手な前沢が、人を殴るとは思えないので殴ら
れる方だったのだろう。

「ああ、俺さんの名誉のために言っとくと、8割は殴る方だからね。
信じるか信じないかは祀くん次第だけでも」

胸の内を量られたらしい。前沢は顎を撫でながら、のんびりと付
け加えた。強がりの嘘だろうか？

けれど、虚勢を張るようなタイプには見えないし、祀が事情を話
した時にも落ち着いていた。まだ協力するという言は得られていな
いものの、警察には通報しないと言ってくれている。案外、荒事に

慣れているのかもしれない。

「もしかすると、医者が必要になるかもしれないねえ」

「ヤバイのか？」

祀は顔を強張らせながら聞いた。

「病院、連れてくかい？」

前沢が試すように聞いてくる。

連れて行くべきだ、とは言えなかった。医者に罹れば、警察に連絡がいく。内密に診療してくれる病院など知らない。

けれど、このまま、彗が目覚めなかったら。

「先輩、どうしてそんな顔するんですか？」

唐突に三池が口を挟んだ。責めるような目で祀を見ている。

「どんな顔だよ」

「苦しそうな顔です。後悔してるんですか？」

「人殺しになるかもしれないのに、笑えるはずないだろ」

「じゃあ、先輩はどうするつもりだったんですか」

「どういう意味だよ」

「俺は殺すしかないって思ってたよ」

飛躍した発言に息を呑む。本当に三池の口から出た言葉だろうか。信じられなくて、マジマジと三池の顔を眺める。三池はしっかりと意思を宿した、厳しい眼差しをしていた。

「だって、そうでしょ。山崎先輩が報復しないなんてあり得ない。報復させないように暴力を振るえば、何倍にもなって返ってくる。

そういう人じゃないですか」

「なんで、言い切れるんだよ」

「山崎先輩がやったことを見てきたからです。麻薬を売らせて、買わせて、色んな人間の人生をメチャクチャにして、それでも笑ってた。拳句の果てには自分だけ逃げた。先輩が一番、知ってるじゃないですか」

「……何が言いたいんだ」

「先輩は大学を退学処分にされて、前科持ちになって、今じゃ昔の

仲間を脅して日銭を稼いでる。家だって借りられない、家族にも顔向けできない。それが全部、この人のせいなんですよ？ 俺も許せません。先輩をこんな風にした人なんて、」

「知った口、利くな！」

聞くに堪えかねて、三池の胸倉に手を伸ばした。

焦りにも似た恐怖が身を包んでいる。おそらく、被告人に死刑を求刑する検事も三池と同じ顔つきをしているだろう。自分は何も悪いことは言っていないと、まるで正論であるかのように、祀がそれを望んでいるかのように 人殺しの許可を求めている。

冗談じゃない。お断りだ。けれど 同じだった。

6年前の祀は？被害者？じゃない。彗の？仲間？だ。それなのに、何もかも彗が悪いと、自らが犯した罪を擦り付けようとしていた。今の三池と同じように。

わかってしまった。けれど認めたくなくて、掴んだシャツに力を込める。

「お前が俺の、何を知ってるってんだ！」

「先輩は、そうやって自分が特別な人間だと思い込んでる！」

悲痛な叫びと共に、胸倉を掴んだ手が払われた。三池は泣き出しそうな顔をして、それでも祀を睨みつけている。三池にこんな顔で睨まれたのも、反抗されたのも初めてだ。飼犬に手を噛まれたような、酷く屈辱的な感情が身を押し包む。

「お前の方が思い込んでるだろ！ 生まれつき金持ちで、顔も良くて……だから要領悪い役立たずのくせに、楽しんで生きてんじゃねえか！」

「だったら、人に頼らなくせに、自分が一番不幸って顔しないで下さい！」

「俺がいつ、そんな面したよ！？」

「今したばかりじゃないですか！」

とんでもない言いがかりだ。頭に血が上って、自分が何を言っているか、わかっていないのだろう。適当にあしらうべきなのだろう

が、祀も鬱憤が溜まっている。暴れてスッキリしたい。ケンカなら好都合だ。しっかりとした成人男性の健康体を持つ三池なら、一発や二発、思い切り殴ったところで死にはしない。

少し高い位置にある三池の顔を見上げて、拳を握る。

と、真横から伸びてきた手が、腕を押さえつけた。

「俺さんは暴力反対」

いつの間にか、前沢が隣に立っていた。相変わらずの糸目で、声音にも緊張感は一切、感じられないが、手首を掴む力は強く、ピクリとも動かせない。

「っ、あんたは部外者だろ！」

腕を振って引き剥がそうと試みた。が、更に強く掴まれて鈍い痛みが走る。

「いつ……！」

「ほら、痛い。暴力がよくないってことが、よくわかっただろう？ ああ、でも坊ちゃん。勘違いしちゃあいけない。俺は殺しにも反対だから」

のらりくらりと前沢が諭す。ならば、どうする気なのか。部外者が口を出すのだから当然、何らかの打開策を用意しているはずだ、と言及しようとした瞬間、

「何してるの？」

あどけない、掠れた声が遮った。

ソファアの上に姿が見える。起き上がって寝ぼけ眼でパチパチと瞬きを繰り返している、彗の姿が。

彗は酷く無防備な仕草で目を擦り、それから自分の両手が拘束されていることに気づいたらしい。「なにこれ」と小さく呟いて、助けを求めるように祀たちを見た。

「どうして俺はこんな扱いを受けてるの？」

祀は妙だ、と思った。彗は頭の回転が早い男だ。こんな扱いを受けている理由なんて、すぐに理解できる。わざわざ聞く理由はなんてない。

ドクドクと血が騒ぐ。何か、物凄く嫌な予感がする。

慧はひとしきり周囲を見回して、首を傾げた。ここがどこだかわからない、そんな動作だ。

そうして祀たちの顔も同じように眺めて 同じく首を斜めに傾ける。

「……覚えてないのか」

カラカラに乾いた声で問う。

「覚えてない。君たちのことも、俺の名前も」

慧は迷子になった子供のようにな、頼りない口調でポツリと答えた。

翌朝、祀は前沢が用意してくれた朝食を断って、三池家のリビングのソファ―にグッタリと身を預けていた。

身体がだるい。ろくに眠れなかったせいだ。睡眠不足の原因は、斜め向かいのダイニングテーブルに腰掛けて、チマチマと食パンを啄んでいる。いや、啄んでいるというよりも、食パンに塗りつけたイチゴジャムを舐めているといった方が正しい。彗は極度の小食で、尋常じゃないほどの甘党だ。記憶を失っても、体質や嗜好は変わらないらしい。

腫れぼったい目を半眼にして様子を眺めていたら、彗は視線に気づいたらしい。食パンを皿の上に置き、パタパタとスリッパを鳴らして祀の元に近づいてきた。ソファ―の周りに敷かれた毛足の長い絨毯の前で一度、立ち止まり、祀の足元をしばし眺めてからスリッパを脱ぐ。賢い振る舞いだ。とてもじゃないが、昨夜の惨状を引き起こしたとは思えない。

昨夜、あの子のことだ。

とりあえず風呂に入って寝るか、という話になった。

彗は頭痛も、体調の異変も訴えなかった。祀が殴りつけた頬すら、「なんとなく痛い」程度の反応で、これなら医者には要らないだろうと前沢が判断を下し、本来は記憶喪失になっている時点で医者に見せるべきなのだが、全員が全員、事件を表沙汰にすることを拒んだので、祀と彗は今使っていないという2階の客間に滞在することになった。

十分に客間と呼べるツインルームだったが、倉庫代わりにしているらしい。三池の母の物だと思われる靴や服がクローゼットの中に納められていて、おそらく、部屋のどこかに宝石なども仕舞われているのだろう。防犯として外から鍵が掛けられるようになっていた。祀は人を殴って拉致してきた犯罪者であり、彗は記憶喪失になっ

ていても麻薬売りのヤクザだ。自身が眠っている間、鍵付きの部屋に閉じ込めるのは当然の対処といえる。祀はおとなしく従い、彗もそれに従った。

そして祀が先に風呂に入ることになった。惨状が起きたのはその時だ。

彗は頭のいい男だが、子供のように好奇心旺盛だ。「初めて見るものは気になって仕方がない」らしく、おまけに度を超えた無遠慮、我侭が服を着て歩いているような男なので、己の欲求を一切、抑えようとせず。簡単に言くと、初めて上がりこんだ他人の家をこれでもか、というくらいに荒らし倒す悪癖を持っている。

一応、記憶喪失以前の彗を鑑みて、「おとなしくしとけよ」と忠告を与えておいたのだが、まったく効力がなかった。風呂から上がった祀を出迎えたのは、まるで台風でも通り過ぎたかのような客間の風景だ。

テレビにエアコン、照明や電動式のブラインド。リモコンというリモコンが片っ端からオンになり、物が収納されていそうな家具、クローゼットやキャビネット、備え付けの冷蔵庫や生け花の刺さった花瓶に至るまで、中に入っていたものが残らず引きずり出されて、床に散らばっていた。

やったのはもちろん彗だ。それなのに一仕事終えたようなスッキリとした顔でベッドに腰掛けて、冷蔵庫の中から発掘したのだというウィスキーをラッパ飲みしていた。そうして、祀が前沢の元へ報告に行っている間に、酒瓶を握り締めたまま、寝落ちた。

惨状を見た前沢は、家政婦としての職務を即座に放棄して、「起きてからお前さんたちで片付けてねえ」と部屋に立ち入ることすらなく踵を返した。だから祀は寝られなかった。あんな荒れ果てた部屋で安眠できるはずがない。何度か起き上がって、片付けをしようとしたが、その都度、隣のベッドで眠る彗の安らかな寝息が耳につく。照明を点けて片付けを始めたら起こしてしまうだろう、と妙な気を遣ってしまい、結局、一睡もできないまま朝を迎える羽目にな

ったのだ。

「……メシはもういいのか？」

ソファアのスプリングが、ほんの少しだけ沈む。祀は肘掛に肘をついて無愛想に聞いた。

スリッパを脱いで、絨毯の上に上がってきた彗は、ソファアの隅にチョコンと腰掛けた。同じソファアに座ってはいるが、祀からは2人分ほどの距離がある。片付けの際に散々、零した小言が利いているのか、片付け自体が面倒だったのか、彗は表面上、反省の色を見せていた。今も祀の問いにコクリと小さく頷き、膝を抱えて丸くなっている。

記憶を失った不安もあるのだろう。可哀想だが、ここで甘い顔をするとは再び、惨状を引き起こしかねない。彗は「許す」と宣言されれば、叱られた原因も許されたと認識する。本当にそう認識しているのではなく、言質を取って自分を正当化させるのが上手いのだ。

口達者で頭脳明晰、面の皮の厚い、稀代のペテン師。

記憶喪失になって、その知能が失われたとは限らないし、だいたい、記憶喪失も演技かもしれない。

だから祀は気だるい雰囲気醸し出したまま、無言でいた。彗も黙ったままだ。あまりにも静かで、数分も経たないうちに眠気が襲ってきた。

抱えている事情を全て忘れてしまいそうな、のどかな朝だ。心地よい温度の室内、エアコンは点いているはずなのに音がなく、小鳥のさえずりだけが響く。庭に続く大きな窓から柔らかな日差しが降り注ぎ、常緑樹の影がワックスの利いた板張りの床で揺れているのが、目に留まる。

リビングには祀と彗しかいない。三池は祀と彗が客間の片付けをしている間に、顔も見せずに会社へ出勤した。おそらく昨夜のことが影響しているのだろう。三池がそういう態度を取るのなら、祀も三池の顔を見たくない。謝ってくるまで許すつもりがないからだ。顔を合わせれば、またケンカになるのは目に見えている。

前沢は屋敷の中にいるが、客間の片付けチェックをして、朝食を準備した後、「用事がある」と言って自室に引き籠もった。東郷会や上野 慧について調べてくれるらしい。慧には聞こえないよう、こっそりと耳打ちしてくれた。昨夜、鍵付きの部屋に案内したことからもわかるように、前沢も慧が演技をしている可能性に気がついたようだ。三池より何倍も機転が利く。無理に探って、東郷会に嗅ぎつけられるような真似はしないだろう。安心して任せられる。

ゆえに、前沢がリビングに戻ってくるまでやることなく、気の緩みから睡魔は徐々に強くなった。けれど、ここで寝こけるわけにはいかない。慧が隙を付いて逃げ出さないよう、見張っておかねばならないのだ。

どうせなら客間に戻って少し眠っておくか、と凭れ掛かっていた肘掛から身体を起こす。すると、謀ったようにリビングのドアが開いた。

「お待たせ、お待たせ。調べがついたよ。この子は間違いなく上野 慧本人で東郷会所属のヤクザ屋さんだった」

一気に眠気が吹き飛んだ。どこから、つつこむべきなのかわからない。リビングに入ってきた前沢は、前面に「下僕」、背面に「M 気質」と書かれたTシャツを着ており、それだけでも十分どうかと思うのに、前髪をメイドが付けているようなフリルつきの力チューシャで押さえている。

百歩譲って、服装は個人の自由だが、わざわざ耳打ちで知らせた事柄を開けっ広げに報告してくる心理は、さすがに理解できないし、大いに迷惑だ。

危惧した傍から、慧が疑問を口にする。

「俺はヤクザなの？」

「そうだよ。お前さんはヤクザで若頭だ」

「東郷会の？」

「そこより一つ下の。ヤクザ屋さんっていうのは、会社とおんなじでねえ。規模が大きくなると子会社を作るんだ。お前さんが若頭を

やってるのは、紅貞組っていう東郷会直属の二次団体。おまけに：

…」

「勝手にベラベラ喋るなよ」

厳しい声音で、ソファーに近づいてきた前沢を制した。

だが、応じたのは前沢ではなく彗だった。話を遮られたのが不服なのか、彗は前沢に身体を向けたまま、祀を振り返って唇を尖らせてくる。

「祀、怒ってばかり」

「ばっかり、って……今のはお前に言っただんじやないぞ」

「俺も。祀が俺に怒ってるって言っただんじやない。前沢さんに八つ当たりなの？ そうじゃなきゃ俺の前で喋るな、って言ってるみたいに聞こえた。俺の話なのに、俺は聞いちゃいけないの？ なんて？」

やはり知能はそのままなのか、彗の質問は的を射ていた。

「賢いねえ」

前沢が茶化するように拍手をしている。まるでつきり子供相手の態度だ。彗もムツとしたのか、拍手に続いて頭を撫でようとした前沢の手をスルリとかわして、祀の隣に移動してきた。

「ありゃ？ 俺さんの話はもういいの？」

「祀が聞いちゃいけないって言っただんじやない」

意外な言葉だった。てつきり嫌われたと思っていたのだ。

祀の困惑を読み取ったのか、彗は祀の服の袖を指の欠けた右手で握り締めて、思うに至った経緯を説明し始めた。

「祀は俺と一緒にの部屋に閉じ込められてた。でも俺を殴ったり、殺そうとしたりしなかった。だから味方。少なくとも敵じゃない。けど、前沢さんはそうじゃない。それにヤクザな俺の正体を突き止められるくらい裏社会に精通してる。俺が本当はヤクザじゃない可能性もあるけど。したら俺を騙そうとしてるってことだから、余計に裏があるって思う」

理に適った言い分だ。前沢は「困ったねえ」と言っただんじやない。

善意を袖にされたにしては、随分と気楽な態度である。本当に裏があるのかもしれない。

「……何か、企んでるのか？」

「おいおい、そこで俺さんを疑うのかい？」

前沢は疑いを払うように、片手を振った。

「どう考えても俺さんより、その子の方が疑わしいよねえ。だって今も昔も麻薬を売ってるんだから。ヤクザの若頭をやっても、まったくおかしくない。違うかい？」

「そんな人間と関わろうとしてる時点でおかしい」

彗がピシヤリと否定した。冷静な見解を述べていても、やはり不安なのだろう。袖を掴む力は強く、ロングTシャツの肩口がズルリと落ちる。首筋が露になって肌寒い。三池の服を借りているのでサイズが合っていないのだ。

彗も同じく、サイズの合っていないシャツを着ている。祀よりもブカブカだ。スーツを着ている時は中背中肉に見えた彗だが、こうして見ると、病的なまでに痩身であることがわかる。ろくに飯を食わないのだから当然だ。

そういえば、この指はどうしたのだろうか？

肩口を引っ張って服を元に戻し、今度は腹の辺りに移動してきた彗の右手を見下ろして、今更ながら疑問に思った。

6年前まで、彗の右手の指は全て揃っていたのだ。それが、今は人差し指と親指しかない。他の指は第2関節で途切れている。事故で失ったにしては少々おかしい方だった。

もしかして、ヤクザに切り落とされたのだろうか？

だとすれば、彗は無理やりヤクザをやらされているのかもしれない。記憶喪失のフリをして、祀や三池を利用して、ヤクザから逃げようとしているのかもしれない。

さりげなく彗の様子を観察する。彗は厳しい顔で前沢を見つめていた。命綱だといわんばかりに祀の服をしっかりと掴んで、離れる気配は微塵もない。

「じゃあ、一番納得できる理由を言っただけよう」

間を置いて、前沢が渋々といった様子で口を開いた。

「東郷会に迎えを寄越してくれて連絡を入れたい。おとなしくしててもらわなきゃあ、俺さんの面子は丸潰れだ」

前沢が、東郷会に連絡？

あんまりにも突飛な報告に言葉が出ない。

祀よりも早く、彗が疑問をぶつける。

「なんで、前沢さんの面子が潰れるの？」

「俺さん、昔はヤクザでねえ。東郷会4代目の下で働いてたことがあるんだ。お前さんは4代目のお気に入りだから、手元に返してやりたい。4代目には世話になったんでねえ」

前沢は言うだけ言っただけ背を向けた。ダイニングテーブルの上の食器を一つに重ねて、トレイの上に載せていく。祀たちがどう受け取るうが関係ない、といった態度だ。

何故、そんな態度を取るのか。理由はすぐに知らされた。

「連絡は入れたが、1時間後にしてくれて言っただけだよ。俺さんも着替えて準備をしなければならぬし……逃げる暇くらいはあげたかったからねえ」

前沢が出て行った後、リビングを訪れる人間はいなかった。ヤクザが殴りこんできたわけでもなく、春めいた日差しもそのまま、やはりのどかな朝だ。

前沢は本当に元・ヤクザなのだろうか。そして、自分たちを見逃がすつもりなのだろうか？

壁に掛かった時計を見る。現時刻は11時15分。迎えが来る1時間後はおそらく12時だろう。前沢が東郷会に連絡を入れてリビングに来るまで10分、立ち去ってから5分。待ち合わせは区切りのいい時間に合わせるものだ。

そう考えると前沢の発言は一気に真実味を帯びた。

「彗、逃げるぞ」

のんびりとソファに座っている場合じゃない。祀は傍らに座っている彗を急かして立ち上がった。

「なんで？」

彗は祀の服を離して足を組み、気のない表情で途切れた自身の指を擦っている。今までの話を聞いていたのか、と問い質したくなるような落ち着きようだ。

「お前、自分がヤクザってことに抵抗感ないのか？」

祀は怪訝な表情で彗を見下ろした。

この態度は記憶喪失でなくともおかしい。この6年、彗がどんな人生を送っていたかは知らないが、好き好んでヤクザに属しているとは思えない。

彗は6年前、ヤクザに追われていたのだ。おまけに指が3本無くなっている。執念深い彗が自ら望んで、従属するだろうか。天地がひっくり返っても、ありえない話だ。今の今まで自由を奪われていたとしても、逃げられるなら逃げたいと思うのが普通で、そこから報復を企てるのが彗である。

「まあ、ないって言ったら嘘になるけど」

彗は平然とした顔で答えた。冷やかかといってもいい。先ほど、前沢を前にしていた時とは別人のような態度だ。

「だったら戻らない方がいいだろ」

祀は戸惑いながらも言い募った。

「じゃあ聞くけど。どこに逃げるつもりなの？」

「どこって……」

「決まってるじゃないでしょ。そんなことじゃすぐに捕まる。祀の顔はバレてなくても、俺の顔は知られてるんだから」

鋭い指摘に言葉が詰まった。たしかに彗の言うとおり、この屋敷を抜け出したところで行くアテはない。

「だったら、どうすりゃいいんだよ」

途方に暮れて、助けを求めるように彗を見た。今の彗は昔の彗と変わらない。どんな状況であつても、打開策をはじき出してくれそうな気がする。

祀の期待に答えたかのように、彗は一瞬たりとも悩まずに口を開いた。

「祀が一人で逃げたらいいんじゃない？」

拍子抜けしてしまうほど、あっさりと告げられた。今まで立てた仮説を覆すには十分な、やっぱりヤクザに戻るのを望んでるんじゃないか、と疑うような淡白さだ。

けれど続いた言葉で、もう一度、覆る。

「3日でいいよ」

ニツコリと満面の笑みを浮かべて、彗は断言した。何が3日なのか。どうして、そんな風に笑うのか。

本当に、俺を逃がすつもりだからだ。

笑みを見て、日数を聞いて確信した。記憶喪失はもはや関係ない。彗は自分が東郷会に戻ることで、今回の一件を収めようとしている。だって、そうじゃなければ辻褄が合わない。

日数は逃亡期間だ。3日間、身を隠せということだ。

けれど3日と区切る必要がない。わざわざ3日待って祀を誘き出す必要がどこにある？ 東郷会に連れ戻された瞬間から、延々と追い回せばいい。なんなら迎えが来るまで祀を引き止めて、「こいつのせいで記憶喪失になりました」と言っただ方が手間も掛からない。完璧な笑顔を浮かべているのは祀を安心させる為だろう。けれど安心させて何をしようというのか。騙すつもりなら怯えている方がいい。先ほどまで、そうしていたように。

祀が気づくことを、彗が気づいていないとは思えない。きっと、彗は前沢の話を聞いて決めたのだ。

祀が、自分を気にすることなく逃げられるように、と。

「早く行きなよ」

笑顔のまま、彗が促してくる。

気安い声音に胸の奥から感情が込み上げた。悔しいような、苦しいような腹立たしさ。けれど、彗に対する憎悪じゃない。こんな風に言わせてしまう、自分が嫌だった。

だって、こうなったのは俺のせいだ。

彗のせいじゃない。6年前だってそうだ。祀は自分で麻薬を売ると決めた。それなのに彗に勧められたせいだ、と身勝手に恨んで、殴って、記憶喪失にして、無理やり連れてきた。

そうして今も、彗に全てを押し付けようとしている。

これでは自分を警察に売った仲間たちと同じだ。「アイツが言っただから」と自分の罪を人に擦り付けて、そ知らぬ顔で安穩と生きている連中と同類になってしまう。

俺は、違う。

強く思い、ぐっと拳を握った。怖気づく心を振るい立たせるよう腹に力を入れて、彗の隣にどっかりと座り直す。

「逃げないの？」

彗は祀の行動に、驚いたような目を向けた。

「お前は記憶喪失なんだろ。何も知らねえのに、ヤクザって可哀想だ。俺も一緒についてってヤクザと交渉する」

「どうやって？」

「東郷会4代目に直談判する。彗は不慮の事故で記憶喪失になっちゃったから、ヤクザを引退させてくれって」

「なんで、そこまでしてくれるの？」

「彗は訝しげな表情をしている。祀が殴ったせいで記憶喪失になったと説明してないからだろう。」

祀はこうなった経緯を包み隠さず話した。どんな風に思われても構わなかった。黙っていても、東郷会の元に連れて行かれたらバレルのだ。自分の口で説明しておいた方がいい。

「彗は祀の話をおとなしく聞いていた。」

「元はと言えば俺のせいだ。だから、俺は逃げない」

全ての出来事を伝えて、覚悟を決めて言い切った。彗の様子を横目に見る。顔を見て話すほどの勇氣はなかった。

嫌われただろうか。

少し不安になった。彗は眉間に皺を寄せて、膝の上に置いた自分の手を見つめている。途切れた指を撫でて　おそろく癖になっているのだろう　怒っているというよりも、考え事をしているようだ。

「祀は損な性格をしてるね」

しばらくして、呆れた声が聞こえてきた。言われなくても自分が一番わかっている。少々ムツとしたので「お前はそれを利用する人間だ」と言い返そうとしたのだが、

「でも、ありがとう。ホントはちよつと怖かった」

頼りない笑みを浮かべた彗に、遠慮がちに袖を引かれて、何も言えなくなってしまった。

再びリビングに現れた前沢は、これまでの趣味の悪さを払拭するようなヤクザらしいファッションをしていた。

前髪をワックスで後ろに撫で付けており、服はダークグレーのスーツと深緑色のサテン生地シャツ。ネクタイはしておらず、襟元がザツクリと開いている。そこからヤクザ定番の金色のネックレスが覗いていて、腕時計も金色だった。

これはこれで趣味が悪い。しかしヤクザの事務所を訪れるには相応しい格好だ。それに不思議と似合っている。

「ああ、そうだねえ。でも門の前でいいよ」

前沢はダイニングテーブルに寄り掛かって、携帯で電話を掛けていた。相手は迎えに来たヤクザだろう。車を停める場所を指示しているようだ。

現在の時刻は12時を5分ほど過ぎている。

前沢は12時ちょうどに、リビングに現れて、ソファアームに座る祀と慧の姿を見つけた途端、大仰に驚いてみせた。

それを見た祀はより一層、気を引き締めた。やはり前沢は信の置けない男だ。驚いておきながら、理由も聞いて来なかった。本当は逃げないとわかっていたのかもしれない。

「お待たせしたねえ。じゃあ、行こう」

指示を出し終えたのか、前沢は電話を切り、行きつけの居酒屋へ案内するような気軽さで祀たちを促した。

もちろん行き先は居酒屋なんかじゃない。けれど今更、逆らうつもりもない。おとなしく前沢の後について歩く。

屋敷を出ると、少々寒かった。先ほどまで晴天だった空が灰色の雲で覆われていて、吹きつける風の冷たさが首と襟首の間から染み入ってくる。

祀はパーカーの襟を掻き合わせて、門までの、門までにしては遠

い距離を歩いた。3歩前を前沢が歩き、祀の隣には彗が並んでいる。祀は面倒だったのでパーカーだけを返してもらったのだが、彗はコインロッカー室で見た時と同じスーツに着替えていた。ベージュ色のコートも一緒だ。

同じ服装をしていても随分と印象が違う。彗は落ち着きなく周囲を見回していた。記憶喪失だからなのか、祀の受け止め方が変わったのか。どちらにしても不安げに見えて、守ってやらねばという気になる。

「うおーい！ゼンさん！」

野太い声に顔を上げると、門の外で男がブンブンと手を振っているのが見えた。アレが迎えにきたヤクザなのだろう。男の背後に黒塗りのセルシオが停車している。

「わざわざ呼びつけてすまないねえ、桂」

「11年ぶりだつつのに、ゼンさん、水臭いべ」

「直参幹部が2人がかりでお出迎えだからねえ。謝っておかなきゃあ、どんな目に遭うか……後が怖いだろう？」

桂と呼ばれた男は、門の外に出た前沢の背中をバシバシと叩いた。桂に悪気はなさそうだが、前沢は痛そうだ。

桂はアメフト選手と力士の間を取ったような、ずんぐりとした体つきをしていて、派手な柄物の開襟シャツと灰色のスーツを着ている。一目でヤクザと知れる姿だ。

けれど、これは柄の悪いスーツを着ているせいだろう。ニツカポツカとTシャツを着せたら気のいい土木作業員だ。髭とモミアゲが繋がった四角い顔に、ニツカリと満面の笑みを浮かべていて邪悪さは窺えない。

それよりも、やばそうなのは桂の後方に控えている男だ。

「綾瀬。お前さんは相変わらず顔色が悪いねえ」

前沢の言つとおり、綾瀬は不健康そうな男だった。

年は桂と同年代、30半ばといったところだろうか。両眼が落ち窪んでいて、目の下に真っ黒なクマがある。彗と同じくらいの瘦身

で頬もこけていた。特徴だけ羅列すると貧弱な男に思えるが、ドロリと濁った目をしていて、とてもじゃないがカタギには見えない。おまけに酷く無愛想だ。前沢が声を掛けても、スンと鼻を嚙りながら会釈をしただけで、そそくさと運転席に引っ込んでいった。

これが、現実のヤクザか。

もつと威圧的な、ヤクザらしいヤクザが出てくると思っていた祀は少々、拍子抜けしながら車の後部座席に乗り込んだ。

彗を挟んで、両隣に前沢と祀が座っている。運転席には綾瀬、助手席に桂。エンジンが掛かると同時に桂が「暑苦しい」と言って窓を開けた。助手席の真後ろに座っている祀は思わず渋面になったが、桂の気持ちは理解できる。

男が5人も乗れば、定員数5名のセルシオであっても手狭に感じる。広さの問題ではなく、空気がむさ苦しいのだ。

どの道、ヤクザに文句を言える度胸などない。祀はひっそりとパーカーのフードを首に寄せることしかできなかった。

「真人は元気にしてるかねえ」

ふいに前沢が口を開いた。

「4代目はご立腹つす。姫が哭牙を放置して行方不明だ、つって……まあ、あとは言わなくてもわかると思うんすけど」

「真人は過保護だからねえ」

「でも、たしかに姫が自分の意思で哭牙を放置するはずがないんですよ。だから俺らもとりにあえず探してみるか、って話してたトコだったんす。まさか、ゼンさんが保護してるとは思わなかったすけど……」

運転席の綾瀬は相変わらず口を噤んだままだ。桂が前沢の相手をしている。祀は交渉の材料を探すべく、注意深く話に耳を傾けていたが、わからない単語が多すぎた。

哭牙。姫。誰の話だろう？ 彗以外に行方不明になっていた人間がいたのだろうか。けれどゼンは前沢のことだ。三池の屋敷以外の場所で身柄を預かっていたのだろうか？

疑問が顔に出ていたのか、前沢が自発的に説明してくれた。

「哭牙つてのは4代目の愛刀でねえ。研ぎに出してたのを姫が取りに行つてたらしい。で、お前さんと鉢合わせた、と」

「コイツが姫を殴つて、記憶喪失にしたんすか」

バックミラー越しに桂が睨みつけてくる。どうやら祀が麻薬だと思つていた彗の荷物は4代目の刀だったらしい。そして彗は彼らに姫と呼ばれているようだ。

男に姫つてどうなんだ。

思えども言葉にできない。桂は、先ほどの気のいい笑みが幻であつたかのような獰猛な目つきで祀を睨んでいる。

「ねえ。さつきから姫、姫つてうるさいんだけど」

と、彗が不満げな口調で口を挟んだ。

すぐさま、前沢が宥めに掛かる。

「ずつとそう呼んでるんだ。しょうがないだろう？」

彗はしばらく前沢を睨んでいたが、ふいと顔を背けた。

「あはは、嫌われたかねえ」

「昔からゼンさんは嫌われてましたよ」

ここでもうやく綾瀬が言葉を発した。ようやくの一言目が嫌われ者扱い、元・上司相手にいい度胸だ。

祀はこれまでに聞いた会話から、前沢と桂・綾瀬の関係を推測して、そう思った。

桂と綾瀬は前沢の元・部下、少なくとも立場は下だったと考えられる。2人とも前沢に対して敬語を使っているからだ。それだけでなく、前沢は東郷会4代目を呼び捨てにしている。11年前、言つていたか ヤクザ時代の前沢は相当な立場であつたに違いない。だが何故、そんな人物が三池家で執事をやっているのだろうか？

祀は不思議に思い、吹き込んでくる風の寒さに身を竦めながら前沢を盗み見た。

「嫌だねえ、記憶喪失になつても変わらず？」

相変わらずの糸目、のほほんとした雰囲気。前沢の様子は屋敷に

いた時となんら変わらない。ヤクザ時代もこんな人物だったのか
だったのだろう。桂に、前沢を気に掛ける素振りは見えない。シ
ートベルトを付けたまま、後部座席を振り返って、中央に座る慧へ
と手を伸ばしてきた。

そうして犬猫を構うように、慧の目の前で指先を振る。

「つか、俺は姫が記憶喪失になったってえのが……姫、ほれほれ、
こっち向いて俺の名前、言ってみ？」

慧はしばらく冷やかな眼差しで指先を見つめていた。あからさ
まに怒っている顔だ。桂を恐れたというよりも、文句を言う気さえ
失せたのだろう。祀のパーカーの肩口に顔を埋めて、しっかりと両
眼を閉じた。

その様子を見た桂が、顔を顰めて舌打ちをする。

「ちえっ、逃げられた」

「お前も元々、好かれてないからな」

ここでも、綾瀬が指摘した。

「そんなことねえべ。俺と姫は仲良しこよし。なー？」

桂はあっさり返して、諦め悪く慧に笑いかけた。まるつきり子供
相手の対応だ。たしかに慧も祀も、桂より随分年下だが　　そうい
えば前沢も慧を子供のように扱っていた。

もしかすると、子供の頃からの知り合いなのだろうか？

いや、それだと変だ。だって慧は6年前、ヤクザに追われていた
のだ。東郷会以外の組に追われていたのかもしれないが、それだと
もつと変な話になってくる。

何故、慧は東郷会を頼らなかった？

「……えらく、お前に懐いてるな」

こちらに向けられた声にハッと顔を上げた。車は信号に引っ掛か
って停車しており、綾瀬が落ち窪んだ目で祀を眺めている。人を眺
めるというより、観察、という表現に近い。

嫌な目だ。落ち着かない。身じろぎをして窓ガラスに視線を向け、
早く信号が変わらないか、と念じていたら、

「お前は死ね」

何の前置きもなく、綾瀬が言った。

胃の中がスツと冷える。遅効性の毒のように、ゆっくりと。

綾瀬の声は独り言のように何気なかった。大声を出されたわけでも、ドスが利いているわけでもない。

「カタギさんを脅したら、真人に怒られるよ」

前沢がそう言うまで、どのくらい時間が経っただろう？ 車はいつの間にか走り出していた。ずっと窓の外を見ていたのに気づかなかった。そのくらい綾瀬の発言に肝が冷えた。

祀の気持ちを知ってか知らずか、綾瀬はムツとした口調で前沢の言葉に反論してくる。

「姫がこんなじゃ困るんですよ」

「そりゃあまた、どうして？」

「先日、白頭鷲が問題を起こしたんです。そもそもはウチが原因なんです……ゼンさん、ウチで扱ってる麻薬が特殊なモンだって知ってます？」

「うつすらと」

「雪糖シエタンってヤクなんですよ。ウチの組にちよろまかそうとしたヤツがいたんですよ。で、白頭鷲の連中は独自の情報網で事前にそれを知ってたにも関わらず、泳がせてたわけで」

「で、ブツが盗まれた？」

「いや、ブツは無事だったんですけど、ブツの運搬路を書いた書類がどこぞの組織に流れちまって……この組織が白頭鷲の本星らしいんですよ。それで、流された先は自分らの手で洗い出すから手を出すなって釘を刺してきたんです」

綾瀬は今までの態度から一転して、饒舌に語った。今まで無愛想だったのは、祀に対する怒りを押さえていたからかもしれない。それはそれで問題だが、ひとまず安堵した。綾瀬は血も涙もない冷血漢というわけではなさそうだ。

「……他人の組にまで口出しするようになったって？」

ほっとしたのもつかの間、今度は前沢が低い声でボソリと吐いた。窓から視線を戻す気にはなれなくて、どんな顔をしているかはわからないが、今まで聞いたことのない、いかにも不機嫌といった声だ。

白頭鷲とかいう組織に恨みでもあるのだろうか？

疑問に思えども、思ったただけなので答えは返らない。

「それを上手く退けてたのが姫なんですよ」

「へえ。姫、偉くなったんだねえ」

話は流れて、前沢の声音はすぐに元の調子に戻った。性懲りもなく、彗の頭を撫でようと試みたらしい。肩に乗っていた頭の重みが消え失せて、代わりに身体がグイグイと押される。前沢から少しでも距離を取ろうとしているらしい。

「ホント、嫌われてるんすね」

しみじみと、哀れむような口調で桂が言った。

「傷つくねえ」

「なんか、身に覚えないんすか？」

「どうだろうねえ。単に虫の居所が悪いただけだったりして」

「あー、ありえそうっすね、それ」

相槌を返して、ようやく桂が窓を閉めた。流れ込んでくる冷たい風が止まって、ふと肩の力が抜ける。車内の空気も元通り、乗り込んだ直後のように和やかだ。

他愛もない世間話が続く　　つい先ほど味わったばかりのヤクザの恐ろしさは、すぐさま薄れてしまった。

人間は現金な生き物だ。どんな恐怖でも過ぎ去れば、すぐに忘れてしまう。それが防衛本能というやつなのだろう。誘拐された子供なんかは事件そのものを忘れてしまう、と聞いたことがある。恐ろしいと思えば思うほど、人間はその記憶を忘却しようと勤めるものなのだ。

だから、これも早く忘れたい。

手の甲に押し付けられた冷たい金属。ガチリと振動が伝わる度に、吐きそうなほど心臓が荒ぶる。できることなら泣き出したい。泣き喚き、大声で命乞いをして、退室したい。

だが、腹の底を振るわせる低い声が欲求を虐げる。

「次だ」

声を発した男は、祀が座っているソファから1mほど離れた場所でショットグラスを傾けている。黒いスーツを着た男だ。服装で目に留まるのは、両手に填めた黒い皮手袋だけで、特にヤクザらしい箇所は上げられない。キツリとネクタイを締めていて、シャツの色だって普通の灰色だ。

ただし、とにかくデカイ。

190センチを超えていそうな長身。肩幅は広く、胸板は厚く、腕は太くて足が長い。体型だけでも十分にサラリーマンではないと知れる。モデルをやれそうなスタイルだ。

だが顔が悪い。造作が悪いのではなく悪人顔なのだ。それも稀に見る、滅多に見ない、これでもかというぐらいの悪人顔である。歩いているだけで職務質問を受けそうな、立っているだけで子供を泣かせそうな、間違いなく人を殺しているだろうと思われる、威圧感に満ち満ちた凶悪な顔つきだ。

紹介される前にわかった。現れた時点で確信した。

この男が東郷会4代目、郷田 真人だ。

「俺あ3本だ。ゼン、上を張れよ」

「じゃあ10本でいくよ」

「随分、大きく出るじゃあねえか」

「祀くんは案外、根性があるからねえ」

のほほんとした前沢の口調に苛立つ。前沢は郷田と同じように、事務机に凭れ掛かりながらグラスを傾けている。この鬼畜極まるゲームの発案者だとは到底、思えない。

ここは東郷会本家の事務所だ。

そして祀は、彗に拳銃を向けられていた。

このゲームのルールは至って簡単。本物の拳銃を使つてのロシアンルーレットだ。拳銃の装弾数は6発。手の甲に向けて引き金を6回引けば、祀と彗は解放される。

6発に6回。非常識なルールである。ロシアンルーレットは弾が1発込められているゲームだ。6回、引き金を引いたら、必ず弾が飛び出す。

ヤクザらしい、横暴で卑怯なルールだと思いきや、

「真人が用意した、実弾の入ってない銃を使うんだ」

前沢は最後にそう付け加えた。

もちろん祀と彗は本当に弾が入っていないか、確認することができない。要は郷田を信用できるか否か、だ。

祀は前沢の言に従い、話に乗った。

「本来なら有無を言わず制裁を加えられる。これで済むなら安い」と前沢は言った。「東郷会4代目が騙し討ちをしたとなれば、不名誉もいいところだ」とも。

引き金を引いても弾は出ない。絶対に出ない。

思えども、祀は引き金を引けなかった。ソファーに浅く腰掛けて、冷たい木製テーブルに手をつき、その開いた手の甲に銃口を向けて一切、動けなくなってしまった。

前沢と郷田は、そんな祀を賭けの対象にしていた。何分で引き金

を引くか。そして、30分が過ぎてからは「何分でギブアップするか」になった。

酷く屈辱的だった。けれど、どうしても引けない。

銃口を向けた先にあるのは自分の手だ。

チェロの弦を押さえる左手なのだ。

そう考えると指が動かなかった。もうチェロを弾くのをやめてから何年も経っているのに、まるでチェロが弾けなくなるのを惜んでいるかのように、引き金が引けない。

それほど、チェロを大切にしていたわけではないのに。音大を退学になって「もうやめた」と捨てられる程度なのに。

結局、チェロを引き合いに出して、認めたくないのだ。

痛みが怖い。血が出て、骨と肉が弾け飛ぶのが怖い。

そんな恐怖心さえも認められない自分が心底、情けない。

「遅え。もういい」

ピクリとも動かない祀に、郷田の低い声が降った。

祀は正直、ホツとした。先がどうなるかなんて、どうでもいい。

目の前にある恐怖が取り払われて感謝さえした。

けれど、彗がそれを遮った。

「冗談。俺の人生も掛かってるのに。祀が撃てないなら、俺が撃つよ。それくらいの特権はあるでしょ」

この時、彗はコインロッカー室で見たのと同じ、酷く酷薄で歪な笑みを浮かべていた。祀は呆然と彗を眺め、裏切られた、と思う暇すら与えられなかった。

彗は祀から拳銃を取り上げ、ニッコリ笑って言った。

「嫌だったら言ってね」

そうして躊躇なく引き金を引いた。

ガチン、と音が鳴る。5回目だ。

「チツ、負けた」

これで3連敗、またもや賭けに負けた郷田が舌打ちをしている。

彗が銃を握ったことで、郷田と前沢の賭けは「祀がストップを掛けるか否か」に変更された。

郷田はずっとストップ一点張りだ。よっぽど祀が臆病者に見えるらしい。腹立たしいが、そのとおりだ。ガチガチと奥歯が噛み合わなくて、舌の根まで乾いている。恐怖と緊張が心を占めていて、文句の一つさえも思い浮かばない。

怖い。それだけだ。何も言えないし、何も出来ない。

だって彗は自分に銃を向けている。

狙っているのは手の甲だ。けれど、いつ心臓に向くか、眉間に向くか。運よく彗から拳銃を奪えたとしても、祀はヒットマンじゃない。格闘家でもない。人など殺せない。

木製のテーブルがジツトリと湿っている。身体の機能が狂っているのがわかる。暑いのに寒い。身体の震えが止まらない。息が上手く吸えなくて、もつと大きく息継ぎをしなければ、と酸素を吸い上げたら吐き気が増す。

一際強く、吐き気を感じて思わず口を覆った。

「うえっ……！」

「祀？ 大丈夫？」

えづいても口からは出てこない。代わりに涙が滲んで、覗き込んできた彗の顔が滲んで見えた。向かいのソファから腰を浮かせて、祀に手を伸ばしている。

指の揃った左手だ。銃を握っていた細い指だ。

だったら、銃はどこにある？

無意識のうちに視線を走らせた。銃。命を奪う黒い塊。こんな目に遭わせる物。憎むべき武器。

「ああ、次で最後だねえ」

前沢が和やかな声でそう呟いたのと、祀が拳銃を見つけたのは同時だった。

そうだ。もう1回しかない。

彗の手を払い、拳銃に手を伸ばした。机に脛が当たったが痛みは

薄い。ガタンと乱暴な音が鳴る。「祀！」と、名前を呼ぶ声がする。誰の声かも、もはや理解できない。

銃のグリップを握って、立ち上がった。

何故、こんなゲームに付き合わされているのか。ここに連れて来られた要因。誰が悪いかなんて決まっている。

「俺を撃つの？」

彗はあどけない顔をして、祀を見上げていた。銃口を向けられているとは思えない、キョトンとした表情だ。

どうして、こんな顔ができる？

わからない。

ただ、どうしようもなく悲しくて、涙が溢れた。

悲しくて仕方がない。銃口を向けられたことも、向けていることも、何もかも認めたくない。こんな風になりたくて声を掛けたんじゃない、と今になってわかった。

話をしたかった。チェロを聴かせてやりたかった。

昔のように、穏やかな時間を過ごしたかっただけ。

「俺が、お前を撃てるはずないだろ！」

言葉と共に、銃を床へと投げつけた。カラカラと床を滑る軽い音が聞こえてくる。祀は「おもちゃのようだ」と思いながら、ソファに座り直して顔を覆った。

遠くで、ため息が聞こえる。直後に彗が立ち上がる気配もあった。銃を拾って、ゲームを再開するつもりなのかもしれない。けれど、もはやどうだっていい。

パーカーの袖で、止まらない涙を拭う。鼻を嚙り、呼吸を整え、どうにか気持ちを落ち着けて、顔を上げ

「4代目。こういうのはどう？」

視界に飛び込んだ彗の姿に、涙も身体も凍りついた。

彗は郷田の前に立っていた。祀に背中を向けて、首を仰け反らせて郷田を見上げている。その手には投げ捨てた銃が握られており

銃口は自身のこめかみに向けられていた。

「なんの真似だ」

「2分の1の取引。俺が死んだら全部、好きにしてい。でも、俺が生きてたら、俺の好きなようにさせて？」

「……おめえが体張るってのか」

「祀だけ、っていうのは不公平でしょ」

止めようとした。しかし、声が出なかった。

それよりも先に身体が動いていた。懸命に腕を伸ばし、彗の背後から頭を両手で掴んで、ぐっと胸元に引き寄せる。

近くでガチン、と重々しい金属音が鳴って、「あ、」と短く彗が声を上げた。

ふらつく。重みが掛かる。倒れる。堪えきれない。

2人ともバランスを崩して尻餅をついた。衝撃が身体の中を競り上がってきて、ガチンと、今度は顎が鳴る。

すぐに口を開けたが、上手く息が出来ない。心臓が騒がしい。力キ氷を食べた時のようにズキズキと頭が痛む。

その痛みさえ、どう受け止めるべきなのかわからず、祀は床に座り込んだまま、場違いなまでに磨かれた灰色の床を一生懸命に注視した。

特に何が落ちているわけでもない。意思で身体を動かせないのだ。死んだら、こんな風になるのかもしれない。はたして自分は生きているのだろうか？

「祀。苦しい」

くぐもった声が聞こえて、ようやく目が動いた。膝の間に彗の身体が、腕の中に頭がある。赤は見えない。体の中に流れる血の色は、見える範囲のどこにも見えなかった。

「苦しいって。聞いてる？」

強張った腕に途切れた指が触れる。袖を引かれて、ガクガクと震えて自由にならない腕を苦心して離れた。

そうして、恐る恐る彗の顔を覗き込むと目が合った。黒い双眸が瞬きをするのを見て、ようやく身体が自由になったのと同時に、今

頃になって、ため息のような声が出た。

「生きてる」

「死んだ方がよかった？」

慧はニツコリと満面の笑みを浮かべた。

安心させるための作り笑顔だ。この期に及んで、あんな無茶をしておいて、心配するなどとも言うのか。

細い身体をぎゅっと抱き締めて、叱り飛ばすように叫ぶ。

「っ、心配、するだろ！」

本当に、銃口を向けられていた時よりも死ぬかと思ったのだ。それくらい心配して今は嬉しい。慧が生きていることが嬉しくて、喜びのあまりに、またもや涙が溢れ出た。

「人の事務所でイチャついてんじゃあねえ。さっさと出てけ、クソガキども」

鬼のような形相をした郷田に事務所から叩き出されて、祀と彗は途方に暮れた。もちろん、事務所に居座りたかったのではない。行き場が無くなってしまったのだ。

祀は元より宿無しの身である。そして彗は記憶喪失だ。少なくとも本人はそう言い張っているし、どの道、彗の家には帰れないだろう。彗は今まで東郷会のヤクザとして暮らしていた。住居も東郷会が用意したと考えるべきだ。

「お前は どうしたい？」

祀は彗にホットココアを手渡しながら聞いた。カップではなく缶に入ったココアだ。この先どうするにしても、必ず金は必要になる。おまけに有限だ。少しでも節約しておいた方がよい、と、2人は事務所から10分ほど歩いた公園のベンチに腰を下ろしていた。

「どうしようか」

彗はココアを受け取り、封を開けずに両手で握った。そうして、薄曇りの空を見上げて黙り込んでいる。今後を考えているというより、ぼんやりとした表情だった。

いつだったか、同じようなことがあった。と、高校時代の記憶がふいに甦った。彗と仲良くなったきっかけの出来事だ。彗は、その時もこんな風に見上げていた。

祀が彗に興味を持ったのは高校2年の5月ごろだ。放課後に音楽室でチェロを練習してたら、帰り際に彗の姿を見つけて「変なヤツ」思ったのが始まりだった。

彗は音楽室の隣の空き教室で、何をするでもなく座っていた。この空き教室は本当に空き教室で、床は埃まみれ、机の上に椅子が上

がっているような場所だ。そんな中、彗は机の上に肘をついて、一人で窓の外を眺めていた。

最初は声を掛けなかった。それまでも屋上で顔を合わせることはあったが、顔を合わせるだけだ。彗はいつも携帯電話で誰かと喋っていたし、祀はひたすら眠るだけ。クラスだって違っただし、何より、住む世界が違っていた。

彗はサボリ魔だったが、問題児ではなかった。頭がずば抜けて良く、三池に匹敵するような大金持ちなのに驕ったところが一つもない。だから友達も多かった。

誰にでも平等に優しく、誰とでも親しく、当たり障りのない出来た人間だ。作り物じみていて、実際、優等生の仮面を被っているのだらうと推測していたから、「たまには一人になりたいんだらう」と特に気に掛けることもなかった。

だが、彗は翌日も、その次の日も空き教室に現れた。

さすがに毎日、見かければ気になってくる。何をしに来ているのだろうか。祀が練習を始める前にはいないのに、帰る頃には必ずいた。変わっているのは体勢だけだ。毎回、同じ窓際の席に座り、同じ表情。生気を感じられない、ぼんやりとした顔で空を眺めている。

祀が帰るのは夕方なので、彗は大抵、真っ赤な夕日に照らされていた。細かい粒子が光に踊り、遠くから運動部の掛け声が聞こえる。学校の中には多くの生徒がいた。けれど、彗の周りは時が止まっているかのように静かだ。

彗の来訪は絶え間なく続き、やがて夏休みに入った。

休みになれば現れないだらうと思っていたのだが、彗は夏休み初日から現れた。祀が訪れた時にはいなかったはずなのに、帰る時には定位置の机に座っていたのだ。

その姿を見つけた瞬間、祀はチェロケースを落としそうなくらい驚いた。もしかすると、これは彗と同じ姿をした幽霊なのではないかと思ったのだ。

休みなのに、わざわざ学校に来て、ぼんやりと過ごす意味がわからない。おまけに空き教室は西向きの部屋で光が差し込むのは夕方だけ。昼間は薄暗く、人氣がない。幽霊の一人や二人、いてもおかしくない雰囲気があった。

けれど、彗は幽霊なんかじゃなかった。ガタリと椅子を引いて、廊下に佇む祀に近づいてきた。幽霊には程遠い、優等生と呼ぶに相応しい、今となっては居心地が悪くなるほど嘘くさい、爽やかな愛想笑いを貼り付けて。

『ねえ。ジューズ奢るから、もうちよつと弾いて？』

それを聞いて、ようやく知った。

彗は、祀のチェロを聴くために、毎日ここにいたのだ。

以来、彗は祀に懐き始めた。優等生は演技で、本性は極悪だったが、祀のチェロを聴く時の姿勢はいつも変わらない。

一心不乱に耳を傾け、演奏が終わると空を見る。彗らしくない、ぼんやりとした表情で。このまま空に溶けて消えてしまうのではないかと思うほどに夢かった。

今も同じだ。隣にいるはずなのに、目を離せば幻のように消えてしまいそうで切なくなる。住む世界が違う、触れられる距離なのに壁がある。その壁のせいで彗は一人だ。

祀は彗の手をぐつと握った。

彗が不思議そうな顔で見つめてくる。

「あのさ……」

俺がお前の傍にいるから。

そう言おうとしたら、彗の顔が強張った。触れられるのが嫌なのか、と思わずパツと手を離れたが、彗の態度が変わったのは、祀のせいではないらしい。

彗は祀の背後を見ていた。振り返ると、柄の悪い3人の男が、肩で風を切りながら歩み寄ってくる場所だった。

ダボダボのジャージとパーカー、唇にまで開けたピアス、太いシ

ルバーのネックレス、カジュアルブランドのロゴが入った野球帽：
…と、絵に描いたようなチンピラだ。

ヤクザだろうか。しかし前沢や郷田よりも随分と若くてスーツも着ていない。こうして見ると、ヤクザの方がまだマシな格好をしていると思う。趣味の良し悪しはともかく、付けている物は高級だ。この3人は安っぽい。態度もだらしなくて、いかにも使いつぱしりの三下に見える。

3人はベンチの前で足を止めた。やはり祀たちに用があるらしい。真ん中の男が一步前に出て、皮ジャケットのポケットに手を突っ込んだまま、ニヤニヤと厭らしく笑う。

「なあ、ちよつとツラ貸せよ」

「何の用だよ？」

祀は手にした缶コーヒーを飲み干してから、ギロリと男を睨みあげた。いざとなったら、この缶で男を殴るつもりだからだ。せつかく無傷で済んだ両手を、こんな三下に傷つけられたくない。男の顔は骨ばつていて固そうだった。

男の顔から笑みが消えて、一重の目がスツと細くなる。

「あんたじゃねえよ。そっちの、上野だっけ？ ヤクザのおっさんが連れて来いっつつつてんだよ。痛い目に遭う前に、おとなしく渡した方がいいんじゃないの？」

ヤクザのおっさん　まさか、郷田が彗を取り返しに来たのだから？　約束を違えるようには見えなかったのだが。

祀は腑に落ちないながらも、とぼけることにした。

だが、その前に彗がスツと立ち上がった。

「いいよ。行つてあげる。場所はどこ？」

「彗！　何考えてんだよ」

祀はベンチから腰を上げ、彗の腕を掴んで引き止めた。

ところが彗は首だけを傾けて、祀を振り返り、

「頭悪いなあ。まだ俺につきまとうつもり？」

心底、呆れたといった様子で肩を竦めた。

「どういうことだよ」

「まだ、わかんないの？」

ハア、と、わざとらしいため息が降る。

彗は酷く面倒そうに、理由を説明し始めた。

「俺は最初っから記憶喪失なんかじゃない。東郷会を抜けたくて祀たちを利用しただけ。ちゃんと今後の就職先も決まってる。覚えてる？ 雪糖を勝手に売り捌いた人の話。俺はこれから、その人と会うんだよ。仲間にしてもらうの」

全て、最初から仕組まれていたとでも言うのか。

思わず立ち竦んだ祀の腕を、彗がうざったそうに払おうとする。態度にも話の内容にも、不自然さは窺えない。3人の男たちは納得したような顔をしている。しばらくして、「なんだ、てめえ、利用されてたのか」と嘲笑が聞こえてきた。

けれど、これは嘘だ。

「嘔吐くなよ」

祀は厳しい顔で彗の横顔を見つめた。

通じると思うな、俺は騙されない 念を込めた視線で、彗の飄

々とした化けの皮を剥がそうと試みる。

彗はそんな祀を嘲るように鼻を鳴らした。

「どこが嘘？ もしかしてコインロッカーで会った時のこと？ あれは偶然。でも、その後は必然。ミケにセッティングしてもらったの。俺が間宮さん……あ、これから会いに行く人の名前なんだけど。間宮さんに会いたがつてる、仲間にしてほしいって噂を、ミケに流してもらって、」

「それも嘘だ。いいから来い！」

折れるつもりはないらしい。何を言っても無駄だ。

祀は彗の腕を引っ張って走り出した。

「ちよっ……祀！」

彗は声を荒げながらもついてくる。公園を出る頃になって、ようやく我に返った男たちが追いかけてきた。

「待てコラア！」

大声で喚きながら、走ってくる。通行人が見ていてもお構いなしだ。通行人の方も巻き込まれたくないと思っっているのか、祀と目が合った瞬間、サツと顔を伏せた。

どういつもこいつも、自分の保身しか考えていない。

最低だ、と思う。だからこそ、祀は彗の手を離さない。

男たちの様子を見ていればわかる。あれは仲間を迎えに来た態度じゃない。そして彗の態度も変だった。

彗は、あんなにベラベラと内情を喋らない。

もしも彗が本当に裏切っていたら。最初から間宮とかいう裏切り者と結託していたならば。公園で穩便に祀を騙して、人気のない場所に連れ去り、口封じをする。

だって祀は、東郷会4代目と顔見知りになっている。彗の裏切りを密告しないとも限らない。彗は、そんなことに気づかないほど馬鹿じゃない。三池の屋敷でやろうとしたのと同じ　　嘘を吐いて、祀を逃がそうとしたのだ。

「こつちだ！」

遠巻きな好奇の視線に晒されながら、大通りを駆け抜けて小道を突き進んだ。行き先は決まっていらない。けれど、入り組んだ路地に入れば、追っ手を振り切って身を隠せる　　そう考えて、路地への角を曲がろうとした途端、腕がすっぱ抜けそうなほど、強く手を引かれた。

立ち止まって、鼻息荒く振り返る。

「っ、なんだよ……っ、彗？」

焦った。彗は身体が弱い。今になって思い出した。

彗は地面にへたり込んで、ヒュヒュウと喉を鳴らしていた。身体全体を震わせて、尋常じゃなく苦しそうだ。走っている間、無言だったのは自らの意思で黙っていたのではなく、息をするだけで精一杯だったのだろう。祀が「だ、大丈夫か？」と声を掛けても反論どころか、顔を上げることすらできないようで、俯いたまま、思い切

り脛を叩かれた。

「いてっ！ ゴメン、忘れてたんだよ！」

素直に謝ったのに、彗の攻撃は止まない。何度も祀の脛を叩き、繋いだ手を振り払おうとしている。

「逃げるって、言いたいのか？」

この期に及んで諦めが悪い。彗の返事は肯定だった。空いた左手で胸を押さえ、必死に首を縦に振るのが見える。

祀はふと、映画なんかでよく見る光景を思い出した。主人公と傷ついた仲間が敵から逃げる。徐々にスピードは遅くなり、「俺はもう無理だ。お前だけでも逃げる」と傷ついた仲間が叫ぶ。だが主人公の答えは大抵の場合、

「お前だけ置いて、逃げられるはずないだろ」

口に出して言い聞かせた。しゃがみ込み、彗の頭を両手で持ち上げて、伝わればいいと心を込めて断言した。

追いかけてくる連中は素手だし、彗が撃たれたわけでもないが、映画の中の主人公の気持ちがよくわかる。昔は「かつこっけんなよ」と馬鹿にしていたけれど。

「俺は、俺のために、お前を守りたいんだ」

そう。自己満足なのだ。相手がどう思っていようとも関係ない。

ここで逃げれば、一生、後悔する。彗のことを思い出す度に自己嫌悪に陥る。いい思い出が嫌な思い出に書き換えられて、いずれ思い出さなくなってしまう。

人間は悪いことを忘れようとする生き物だから。

だから、逃げたくないし、逃げない。

「おとなしく待ってるよ」

どうして、と言いたげな彗の頭をグシャグシャと、乱暴にかき混ぜて立ち上がる。そうして祀は拳を握り、追いかけてきた男たちの前に颯爽と躍り出た。

現実はいくシヨンのように、甘くない。

祀は闇を見上げて、つくづく実感した。

あの後、祀と彗はあっけなく捕まった。チンピラの3人は見た目ほどバカではなく、キツチリと連携プレイで祀をボコボコにして車を呼んだ。調子に乗って、祀を殴り続けるわけでもない。欲を掻くわけでもない。言われたことをやっただけ。だから余計に性質が悪かった。

彼らは車から降りてきた男たちから金を受け取り、受け取った金が免罪符であるかのように、態度を一変させた。祀と彗に同情するような眼差しを向けてきたのだ。

俺たちは命令されただけ。

だから恨んでくれるな、という態度が酷く癪に障る。けれど、彼らに改善を訴えても無駄だろう。可哀想だと思っているから許される。もっと上がいるから悪くない。表社会であっても、それが通じる世の中なのだ。口先でキレイ事を並べたって拭えない倫理が蔓延している。

そうしてチンピラたちは立ち去り、祀と彗は車で埠頭の倉庫に運ばれた。車を運転していたのは、東郷会を裏切った連中だ。筆頭として名を上げられていた間宮という男も、祀たちが乗せられた車の助手席に座っていた。

だが間宮に、ヤクザとしての迫力は残されていなかった。

赤に黒のストライプが入った派手なスーツ。皺が寄り、汗臭く、床を転げまわったように汚れていた。無精ひげに塗れた顔。春先だというのに、滝のような汗を掻き、呂律もろくに回らない。歯が抜け落ちて白目は黄色くなっている。

パツと見ただけで麻薬をやっているとわかった。

末期だ、と確信したのは車から降りた後だ。

間宮は唐突に苦しみだした。胸を掻き篁り、腕を振り回して、虫が飛んでいると喚く。口から泡を飛ばして、茶色の髪を振り乱し、狂乱の末に彗の顔をいきなり殴りつけた。

「ヤクを出せ！」

記憶が断片的に甦ったのだろうか。ひたすら「ヤク」と連呼して、彗の腹の中に麻薬が入っているとばかりに蹴りつけた。祀が止めに入っても、誰に止められたのか、わかっていないようで「嫌だ、止めるな」と子供のように暴れる。

最終的に、間宮は同席していた仲間の手で、車に押し込められた。しかも、祀が間宮を殴りつけ、気を失わせてからだ。

そして、彼らは酷く面倒そうな口調で言った。

「早く死んでくれねえかな」

これが現実だ。反吐が出そうな現実だった。

「祀。起きてる？」

暗闇の中、彗の声がポツリと聞こえた。どんな顔をしているのかは見えない。祀と彗が閉じ込められているのは、倉庫内のコンテナだ。ピツタリと扉を閉められており、外から鍵を掛けられている。中は真っ暗だった。

「ねえ、祀。返事してよ」

どこか不満げな声音。薄く衣擦れの音がする。

「祀」

指先に、温もりが触れた。

生きていてよかった、と思う。

麻薬を売って、人をあんな風にする悪魔でも、麻薬でボロボロになった間宮の姿を見ても。自分もそれを売っていたと思い知らされたって、彗を憎めない。

彗が殴られたら腹が立つし、死にそうになっていたら助けたい。身を挺してでも守りたい。誰よりも幸せになってほしいし、幸せにしてやりたいと願う。

甘く、切ない。

この感情の名前は、ずっと前から知っている。けれど、都会に降る雪のように淡かった。彗を知れば知るほど、薄れて磨り減っていった。

彗を疑い、恐れて、嫌悪し　傍にただで溶けていく。

恋に至ることなく、失われていくだけの儚い想い。

「身体、平気か？」

言葉を発したことで離れていこうとする温もりを、そつと手の内に留めて、祀は身体を起こした。ずっと天井を眺めていたので気づかなかったが、それなりに目が慣れてきたらしい。左側に影が蹲っているのが見える。

「案外、頑丈にできてる」

表情は見えないが、重篤な怪我は負っていないようだ。彗の声音はしっかりとしており、自身の身体の弱さを皮肉ったせいか、苦笑さえ滲ませていた。

こうやって、彗は何かも一人で終わらせようとする。

「なあ、全部、話せよ」

形の揃わない細い指を、ぎゅっと握り締めた。

迷いはあった。彗は何を目論んでいるようにとも、きつと悪事に加担している。それを聞いて、どうするべきなのか。どうしたいのか。止めるべきか、協力すべきかも判断がつかない。

ずつとそうだった。悪事に加担したくない意思と、彗を守ってやりたい感情の間で揺れ動き、定まらないまま、利益に後押しされる。彗が吐き出す甘言に踊らされる。

「祀には関係のない話」

こんな風に突き放されるのが嫌で、深みに嵌った。

「関係あるだろ。捕まってるんだから」

わかっているのに、食い下がる。

「聞いてどうするの？」

「俺に出来ることだって、あるだろ」

何もない、と言って欲しい。そうすれば、心に溜まった雪解けの汚水は流れ去る。儂くきれいな雪だったと思える。

だが、祀は知っている。

「巻き込んでごめんね。全部、話す」

純白の雪はこうやって、禍々しい闇に染まってゆくのだ。

慧の目論見は大体、祀の考えていたとおりだった。

あんな状態の間宮に正常な判断は下せない。東郷会を出し抜けるような頭も持っていない。ならば、誰かが代わりに頭を使った。間宮を操っていた人間がいる。

「お前、黒幕を誘き出すための罠になったのか？」

「ご名答。俺が一人になれば出てくると思ってたんだ。殴られたのも、気を失ったのも、運ばれた先にゼンさんがいたのも完全な誤算だけど。どうせなら、それを全部、有効に活用できないか、って考えちゃった」

慧はクスクスと笑いながら答えた。まるでイタズラを成功させた子供だ。話の裏に麻薬が潜んでいるとは思えない。

「でも、なんで、お前が罠になれるんだ？」

祀は微かな希望を抱いて訊ねた。

もしかすると、今の慧は麻薬に関わっていないかもしれない。コインロッカー室で、慧が持っていた荷物は麻薬じゃなかった。郷田の刀だ。

しかし、僅か一瞬で、希望は儂く崩れ去る。

「俺、この一年で随分と有名になっちゃって。どのくらいかっていうと、麻薬と、東郷会の上野がイコールで結ばれちゃうくらい。で、なんで名前が売れたかっていうと、俺が雪糖を独占販売してるからなんだよね」

東郷会事務所に向かう車中で、綾瀬が「雪糖は特殊な麻薬だ」と言っていた。つまり、黒幕の連中は慧から雪糖の情報を引き出したいのだろう。

しかし、慧の発言には不可解な部分があった。

「東郷会が売ってるんじゃないのか？」

「東郷会は関係ない。東郷会のシマで、あくまで俺が売ってるの。使ってる売人も俺の私的なツテだし」

「でも、お前、東郷会にいたんだろ？」

「それは副業」

慧の口調は、違和感を覚えるほどに頑なだった。

何かがおかしい。祀は、よくよく目を凝らして慧を見た。

「ヤクザだぞ」

「片手間で出来る職業だよ」

「片手間でやる必要があるのか？」

「シマを借りてる恩返し？」

「金でケリつけるよ」

「だから、俺は東郷会を抜けようとしてたじゃない」

慧は話を打ち切るように断じた。例によって例の如く、酷薄な、人を見下した笑みを浮かべて。

ようやく、わかった。

慧の、この歪な笑みは虚勢だ。

聞かれたくないことを聞かれている。話したくないから、相手を嘲笑って怒りを駆り立てる。怒りに吞まれた人間は操作しやすい。身体の弱い慧には他に退ける方法がない。

そうまでして裏社会に身を置く。表舞台でも十分に活躍できる才を持つているのに、闇に潜んで他人を操ることを好む。それが慧の本質だと思っていた。

けれど、違う。

一年で囷になれるほど名が売れた上野 慧。麻薬には一切、関わっていないと言った東郷会。どちらも慧には必要なかった。だから6年前、慧はヤクザに追われた。

だが何故、追われた？

無断で麻薬を捌いたからだ。そうまでして麻薬を捌く必要はない。

必要があつたとしても彗は金に興味がない。ヤクザを嫌っているわけでもないだろう。金を払って話を通せばよかった。それをしなかった理由は。

「なんで、そんなに東郷会を庇うんだよ？」

祀は答えのわかつた質問をした。

本当はもつと早くわかるべきだった。昔からそうだった。

彗は、麻薬が悪いものだとかわかつている。きっとヤクザ界においても悪いものなのだろう。だからこそ東郷会から遠ざけて、けれど、東郷会以外の組に利益を与えるのも拒んだ。

それらが導き出す結論は一つしかない。

声だ。チェロによく似た、バリトンの低い声。

彗が故郷と呼ぶ声が、東郷会の頂点に立っているからだ。

的を射た質問だったのだろう。闇の中、スツと彗の表情が剥げ落ちるのが見えた。掴んだ指先が強く引かれる。離さずにいたら、冷たい拒絶の言葉が飛んできた。

「庇ってなんかない。俺は何もいらない」

「じゃあ全部、捨てろよ」

静かに強く、願うように口走った。

東郷会も、上野 慧も、麻薬も、全て失えばいい。

それでも、俺は傍にいるから。

腕を辿って、彗の在り処を探った。喉元まで競り上がった言葉は口に出さず、ピタリと抵抗をやめた細い指を握る。

「……祀じゃ、代わりにならない」

しばらくして、知っていた答えが小さく返った。

やっぱり、恋には至らない。

どれだけ距離が近くても、ぎゅっと抱きしめても、チェロを弾いていた穏やかな時間さえ否定されてしまった。

淡雪は汚水も残さずに失せた。

ただ、冷たさだけが心に残った。

コンテナの外に連れ出された時には日が暮れていた。倉庫の中は白い蛍光灯が点けられていて眩しい。思わず掌で日陰を作り、目元を覆った。折り曲げた腕の関節が痛い。

徐々に目が慣れて、倉庫の様子がわかってくる。ところ狭しと並べられたコンテナの間、一際、大きな通路に男たちが集まっていた。人数は15人ほど、年齢層は20代から40代、といったところか。寄せ集めなのかもしれない。2・3人のグループに分かれて、たむろしていて、耳を澄ませると日本語ではなさそうな言葉が耳に入った。

腕さえも拘束されない理由がわかった。

男たちは総じて柄が悪く、黒い銃を手をしている。

殺されるんだろうか？

祀は背中を冷たく固い物体で小突かれながら、ぼんやりと思った。斜め前には同じように、銃を背中に突きつけられて歩く彗がいる。抵抗する気は起きない。この銃には確実に、何発もの弾が込められている。

「おとなしく、している」

通路の中央に出て、ドン、と背中を突き飛ばされた。背後の男も日本人ではない。祀たちが閉じ込められていたコンテナを開けて、「出る」と命じた時もそうだった。見た目はアジア系だが、外国人特有の訛りがある。

黒幕はアジア系のマフィアか。

おそらく間宮が書類を流した組織だ。このアジア系の外国人たちは、そこから派遣されてきたに違いない。

ならば外国に連れて行かれて、売られるのだろうか。

考えてはみたが、なんだか絵空事だった。殴られた身体の痛みの方が切実だ。口の端が切れて頬が腫れている。腕は背中からタックルされて地面に手をついた時に痛めた。動かせる程度の痛みなので、軽く捻っただけだろうが、痛いものは痛い。更なる暴行は勘弁してほしい。

男たちの視線を避けるために俯いて、そんなことを考えていたら、ふと足元に影が伸びてきた。

「船が来た。これでてめえも終わりだ」

顔を上げると、ホスト風の若い男が彗に話しかけていた。

間宮に「早く死んでくれねえかな」と言っていた男だ。この男が実質的なリーダーなのだろう。間宮の姿は見えない。相変わらず車に押し込められているのだろうか。

あんな有様で指揮を取れるとは思えないので、いるだけ無駄なのだろうが少し可哀想な気がした。自ら進んで麻薬に手を出したとしても、自ら進んでリーダーの資格を譲り渡したとは思えない。きつと、この男がぶん取ったのだ。

「どこの船？」

「てめえに答えるかよ」

「そう。残念」

彗は静かに答えた。祀と同じように唇の端が切れて、左目の瞼が腫れている。けれど、コンテナから歩いてくる時にも辛そうな仕草は一度も見せなかった。

冷静だ。一見、諦めたかのように見える。

けれど、そうやって相手を油断させておいて、腹のうちに策を練り、まるで最初から全て企みのうちであつたかのように物事を収めるのが彗だ。

そんな彗の手腕を知っているのか、男も腑に落ちない表情をしている。ワックスで膨らませた髪を手櫛で整えて、あつちこつちに視線が定まらず、落ち着きがない。

「随分と、殊勝な態度じゃねえか」

「殊勝なんて言葉、知ってるんだ？」

クツリと彗が喉を鳴らした。目を伏せたまま、親しい友人へと軽口を叩いたように　　怯えは、どこにも見えない。

馬鹿にしている。祀と同じことを思ったのか、男はカッと顔を赤らめて、彗の胸倉を掴み上げた。

ドスの利いた声が、倉庫の中に反響する。

「てめえ、自分の立場がわかってんのか」

「君こそ、自分の立場がわかってるの？」

彗はニツコリと笑みを湛えて、男の頬に触れた。胸倉を掴まれたままなのに、まるで癩癩を起こした子供を宥めているかのように、優しい手つきで男のこめかみを撫でて、

「急ごしらえの三流が、俺を脅そうなんて百年早いよ」

「ギッ……アアアアア！？」

諭すような声が聞こえたかと思うと、唐突に男の悲鳴が上がった。放り投げるように彗の胸倉を離し、彗に触れていた顔の半分を押さえて、地面の上でのたうち回っている。

「エイジ！」

男の名前らしい。エイジと同じような年齢、服装をした男が駆け寄り、エイジの肩を掴んで声を掛けた。しかしエイジは悲鳴を上げるばかりで、マトモな答えは返ってこない。

「なっ、何をしゃがった！？」

仲間の男は血相を変えて、彗を見上げた。周りに散っている男たちも彗に銃口を向けている。

だが、彗は両手を挙げ、媚びるような笑みを浮かべて、

「撃たないで。目の中に小石を入れただけ」

指先で「これくらいのこと」と小石のサイズを表してみせた。

小指の先ほどのサイズだ。目の中に入れば相当、痛い。けれど、そんな簡単に入れられるものなのか。

他に何か武器を持っているのではないか。

周囲の眼差しに答えるように、彗はあっさりと、何の罪悪感も持っていない涼しげな顔で己の悪行を暴露した。

「麻薬ばかり売ってるように見えるけど、俺の本職は拷問屋さんなんだよね。だから人間の身体が、どういう仕組みになってるか、よく知ってる」

祀は彗の横顔を眺めてゾツとした。子供のように無邪気で、どこ

か自慢げで、けれどサラリーマンが名刺を片手に自分の部署を紹介しているような、その程度の優越だ。

彗はこの期に及んでも、無害で無力な一般人らしかった。

銃口を向けられていても、のたうち回るエイジの悲鳴を浴びても、爽やかな笑顔を保ち続けている。その時点で常軌を逸しているに違いないのに。

「てめえ、ふざけてんじゃねえ！」

痛みがマシになったのか、エイジは怒りの形相で起き上がり、片目を押さえたまま、彗に殴りかかってきた。

「っ、彗！」

祀は咄嗟に彗の腕を引き、そのまま、コンテナの並ぶ細い通路へと一目散に駆けた。

ざわり、と男たちの気配が変わる。

ふざけんな。

祀は迷路のような通路を曲がって、反射的に思った。

助けてやったのだ。彗ではなく、彗からエイジたちを助けてやった。彗は間違いなくエイジたちより格上の悪党だ。銃なんか脅しにもならない。

そして、小石だけじゃない。彗は何か、とてつもない報復を考えている。どれだけエイジたちが優位に見えても、所詮は彗の掌の上で踊らされているだけなのだ。

祀は、彗の報復を見たくなかった。

平気な顔で人を傷つける彗を見たくない。

これ以上 思い出を汚されたくない。

「追いかける！ 回り込め！」

エイジたちの罵声が聞こえてくる。

思わず足を止めると、背中に彗がぶつかってきた。

「何？ 逃げるんじゃないの？」

彗は途切れた指で鼻の頭を押さえて不満げだった。銃を持った人間に追い詰められているのに余裕がありすぎる。

「囲むって言ってるぞ」

「だから逃げようよ」

慧は当然の如く言い切り、祀の手を引いて歩き出した。

「待てって！」

祀は慌てて、その場に踏み止まった。袋のネズミが飛び出せば、当然、捕らえられる。何らかの策を講じなければならぬのに、慧は何も言ってこない。

一体、何を考えている？

「いいか、見つけたら声出せ！ 適当に撃つなよ！」

エイジの声がこだまして、祀はビクリと両肩を震わせた。

同時に、慌しい足音が迫ってくる。乱暴な声のやり取りも響いている。早く動いて、身を隠すなり、一点突破を図るなりしなければ撃たれる。死んでしまう。わかっているのに足が動かない。

死にたくない。万が一にも死にたくない。

連中は殺気立っている。銃を持っている。祀が抵抗すれば必ず撃つ。慧には生かす価値があるが、祀は雪糖のことを何も知らない。必要とされていないのだ。

だって慧にさえ、いらないと言われた。

もしかしたら、慧は祀を見捨ててもかもしれない。

考えたくない。けれど、身の内から声が聞こえてくる。

見捨てられるくらいなら、見捨てた方がいい。

自分が慧を差し出せば。

無事に、安全に生き延びることができる。

元々、慧に生きる資格なんてない。ここから無事に逃げ果せたら、エイジたちへの報復だけじゃない、再び麻薬を売り始めるだろう。そうして多くの人間を不幸にする。

生きていても、害しか生まない。

死んだって、きっと、

「泣く人、いないよ」

一瞬、空耳だと思った。

けれど、目の前で、慧が平然と笑みを湛えていた。

「俺が死んでも、誰も泣かない」

見抜かれた。

打算に塗れた心の内を。慧を犠牲にして、自分だけ助かるうとした醜い心が伝わってしまった。

それなのに、慧は穏やかな口調で祀を諭す。

「祀だけじゃない。人間は皆、こんなものだよ」

トン、と胸を押されて、身体力が抜けた。祀はフラフラと後方に下がり、握っていた指先が掌から離れていく。

怒るでもなく、悲しむでもない。

慧は最初から祀を信用していなかった。それどころか、祀と他の人間を一緒くたにしていた。昔からそうだった。

自分以外、誰一人として信用していない。

そういう人間だと 思っていたのに。

「フエイ。持つてろ」

唐突に、頭上から黒い背広と低い声が降った。

何かと空を見上げることの多い慧は、おそらくコンテナの外に連れ出された時から気づいていたのだろう。落ちてきた黒い背広を拾い上げ、腕に抱えた。

そして、2段積み目のコンテナの上を見上げる。

「いつてらっしゃい。4代目」

黒い青龍刀を手に大きな影が走る。それを見送る慧の横顔は幸せに満ち満ちた、掛け値なしの満面の笑顔だった。

「ゼン。コイツを先に帰らせろ」

コンテナの脇に蹲って、自身の吐瀉物を見下ろす祀の背中に低い声が飛んできた。それほど恐怖を感じないのは、慣れ親しんだチエ口の音に似ていると気づいたせいだろうか。

うつろな目で振り返ると、刀を手にした郷田が凶悪な三白眼で祀を見つめていた。その隣に前沢が、奥には床に伏したエイジと、エ

イジの脇にしゃがみこんだ慧がいる。

あとは全て、無残に斬殺された死体だ。倉庫の中には静寂が訪れ、代わりに血の海が広がっている。

コンテナの上から颯爽と現れた郷田は、当然ながら正義の味方なんかじゃなかった。断末魔の叫びと発砲音を巻き起こし、この場にいた男たちを全員、斬り殺したらしい。

憶測に過ぎないのは、わざわざ確認したくないからだ。

パツと遠目に見ただけで、酷い殺され方をしているのがわかる。

ペンキをぶちまけたような赤の中に、中身を撒き散らした人型が転がっていた。他殺体を見たことのない祀には刺激が強すぎる。静寂が訪れた後、出入り口に向かう道すがらに間近で目撃して、即座にコンテナの端に蹲って吐いた。

「ゲロってるヤツを車に乗せるのは嫌だねえ」

前沢が暢気な声を出して近づいてくる。

「……一人で帰る。触るな」

「俺は殺してないんだけどねえ」

たしかに前沢は騒ぎが収まってから倉庫に入ってきた。直接、人を殺したわけではない。しかし、この状況を見て、平然としている時点で価値観が知れる。

もしかすると、前沢もヤクザ時代に人殺しを経験しているのかもしれない。そう思うと余計に吐き気が込み上げた。

祀以外の全員が人を殺している。おそらく、慧も。

「お前ら、全員、頭おかしいだろ」

口元を手の甲で拭って、コンテナに唾を吐き捨てた。もう振り向きたくない。何も見たくない。全て、忘れない。

それなのに、倉庫を出た祀を前沢が追ってきた。

「待ちなさいって」

「触るなつつつてんだろ！」

「そうも言つてられないんだよねえ。4代目直々のご命令で」

気安く肩を掴まれて鳥肌が立つ。反射的に振り払おうとしたら、今度はヘッドロックを決められた。

「離せ、人殺し！どこに連れてく気だ！」

祀はヘッドロックされたまま、大声で前沢を罵った。しかし、ここは人気のない埠頭の倉庫街だ。誰も祀を助けてはくれない。抵抗も空しくズルズルと引きずられて、倉庫の脇に停めてあった車に押し込まれてしまった。

前沢は誘拐の経験もあるに違いない。鮮やかな手管だった。助手席に投げ込まれた格好のまま、シートベルトで固定されて、もがいているうちに車が急発進した。

「いてっ！」

「おとなしくしないから、天罰が下ったんだよ」

サイドボードへ頭を打ち付けた祀に、和やかな前沢の声が掛かる。より一層、怒りを煽られたが、ここで前沢に殴り掛かるわけにもいかない。車は既に倉庫街を駆け抜けて、一般道に出ていた。ハンドルの奥にある速度メーターを見ると、60キロオーバーのスピードが出ている。車が停まらない限り、ドアを開けて脱出することも難しい。

仕方なく、祀は助手席に腰を落ち着けた。乱れた息を整えて、眉根に皺を寄せたまま、問いかける。

「……どこに連れて行く気だよ」

殺害現場を目撃した口封じとして、殺されてしまふのだろうか。しかし、すぐに否定の考えが浮かび上がる。

口封じなら倉庫で殺せばいい。ならば、わざわざ別の場所に連れて行って、痛い目に遭わせて脅すつもりだろう。

どう考えても、良い考えには向かない。祀は膝の上で拳を握り締めて、緊張感のない前沢の顔を睨みつけた。

「行き先は決まってるないねえ」

「とぼけるなよ」

「本当だよ。俺さんは説明してやれって言われたただだ」

「説明って？」

「さあ？」

前沢は首を傾げた。

「俺さんは当事者じゃないからねえ」

「だったら首突っ込むなよ」

無責任な前沢の態度に苛立ちが募った。

元はと言えば、前沢が東郷会に連絡を入れたせいで、こんなことになっているのだ。思い返してみれば、件のロシアンルーレットも前沢の発案だ。

「同じことを言い返してあげようか」

前沢は車の窓を薄く開けて、煙草に火を点けた。

「俺は巻き込まれたただだ」

「逃げる機会とは与えてあげたと思うんだけどねえ」

言われて気がついた。たしかにそうだ。前沢は祀を逃がそうとしていた。それも一度だけじゃない。

「ロシアンルーレットだってそうだ。本来なら有無を言わず、指の2・3本、持っていけるとこだよ」

口からモワリと煙を吐き出して、前沢はぼやいた。

「感謝の一言くらい、欲しいもんだねえ」

「悪かったよ」

祀はふて腐れながらも謝罪を口にした。前沢の言っていることは正論だ。ヤクザをやめて、三池の屋敷で働いていた前沢の下に彗を連れ込んだのは祀である。どちらかといえば、祀が前沢を巻き込ん

だよなものだっただ。

「素直な子は可愛いねえ」

煙草を銜えた前沢が頭に手を伸ばしてくる。「子供扱いするな」と言いたくなつて、眉間の皺が深まった。前沢が彗の頭を撫でようとして邪険にされていたのを思い出したのだ。

「そっぴや、あんた、彗にも同じことしてたな」

とりあえず、一度だけ撫でさせてやつてから身を引いた。

前沢は満足したのか、あつさりと手をハンドルに戻した。

「姫の頭は、俺さんたちの間で大人気なんだ」

触り心地がよい、という意味だろうか？

祀の疑問を無視して、前沢が新たな疑問を生む。

「まあ、滅多に触らしてもらえないけどねえ。マトモに触れるのは、真人と……楓くらいなもんだ」

「楓って？」

聞き覚えのない名前だ。

「真人の弟分だった男だよ。6年前に死んだ」

「6年前……」

祀は忙しなく指を動かして記憶を探った。楓という名をどこかで耳にしているかもしれない。6年前は彗が死んで、祀が警察に捕まったのと同じ年だ。

考え込む祀に、前沢が助け舟を出してくる。

「真人が言つた説明つてのは、そこらへんの話も含めて、だと思っただけどねえ……聞かない？」

願つてもない申し出だ。祀はすぐさま頷いた。

「突拍子もない話だよ」

前沢は、そう前置きをして話し始めた。

「俺さんが姫と会つたのは20年前だ。どういつ経緯かは知らないが、真人に拾われたって言つてたねえ。姫は昔っから俺さんたちよりも頭がよかつた。だから一人だったんだ」

「親がいなかったってことか？」

「それよりも、もう少しだけ悪い」

前沢は煙を深く吸い込み、煙草を消した。灰皿にガシガシと押し付けられて、火種が細かく砕け散っていく。乱暴な仕草だった。苛立っているのかもしれない。

彗のことで苛立っているのか。そうだとすれば、何を言い出すつもりなのか。祀は固唾を飲んで、前沢の言葉を待った。

「姫は難民発、中国マフィア経由の密航者なんだ」

「はあ？」

開いた口が閉まらないとは、こういうことだ。祀はポカンと口を開けて、前沢の横顔をマジマジと眺めた。

だが、前沢は冗談を言っているわけではないようだ。

「突拍子もない話って言ったよ」

「い、いや、でも、信じらんねえんだけど」

「信じてもらえないと話が進まないねえ」

「じゃあ信じる。信じるけど……なんだよ、それ？」

祀は目を白黒させて訊ねた。

マフィアは理解できる。密航者もどうにかわかる。けれど難民と一体、どういう意味なのか。本当に彗の話をしているのか。島国の日本に子供の難民が辿り着く。フィクションでしかありえない話だ。ましてや身体の弱い彗である。

説明が欲しい。しかし、前沢は粛々と話題を変える。

「まあ、とにかく姫は行き場がなかった。真人に拾われて、俺さんたちと一緒に行動し始めた。真人はその時、既にヤクザの一員でねえ。俺さんや、さっき言ってた楓って男は、真人の下に引っ付いてた、いわゆる舎弟ってヤツだった」

「なあ、俺が聞きたいのは6年前の話なんだけど」

祀は困惑しながら口を挟んだ。話が逸れている気がする。たしかに彗や前沢の過去も気になるが。

「順序立てて説明しなきゃ、理解不能になるよ」

そういうものなのか。だったら仕方ない。祀は渋々納得して、聞き役に徹底することにした。

「えー、どこまで話したかねえ……そうそう、20年前に姫が現れた。姫は難民の密航者だ。それで、俺さんたちは雪糖と関わりを持った。雪糖のことは知ってるだろう？ 6年前、お前さんたちも売ってた新種の麻薬だ」

「新種だったのか」

「知らなかったのかい？」

「知るはずないだろ。他に麻薬売ったこともねえのに」

祀が関わった麻薬は彗が持ってきた分だけだ。他の話は断るよう言い聞かされていたし、祀も雪糖の利益だけで十分だった。何もしなくても日当10万近く貰えていたのだ。

そう説明したら、前沢は苦笑を浮かべた。

「姫は本当に、売人を囲うのが上手いねえ」

「……なんだよ、足元見られてたって言いたいのか？」

この期に及んで、そんなところに憤るのはどうかと思うが、金の話は祀にとって別腹だ。もう二度と麻薬を売るつもりがなくても知っておきたい。損をさせられるのは嫌だ。

祀の胸中を推し量ったのか、前沢はクツクツと笑った。

「祀くんは、とっても日本人らしい」

前沢の言い方は妙だった。まるで自分も日本人ではないようだ。もしかすると、本当に日本人ではないのだろうか？

「あんたも、日本人じゃないのか？」

「俺さんは在日2世だよ。多分、日本と中国の合いの子だ。不法就労の売春婦が母親を名乗ってたからねえ。子供の頃は戸籍もなくて小学校にすら通ったことがない」

「日本で生まれたら、通えるもんじゃないのか？」

「だから祀くんは日本人らしいって言ったんだ」

前沢の口調は穏やかだった。けれど、どこか刺々しさが、正直に言ってしまうと卑屈さがある。

「まあ俺さんの話はどうでもいいよ。雪糖の話だ」

これ以上、自分の話はしたくないのだろう。前沢は強引に話の筋を戻した。

「雪糖は姫の出身地の特産品でねえ。精製法も原料もわからないが、ケシよりも量が取れて、コカよりも上物で、大麻やら覚せい剤なんかとは、比べ物にならない依存性を発揮する麻薬なんだ。姫はそれを、まずは俺さんたちに売らせた」

「あんたたちに？」

「そうだよ。15年ほど前だったかねえ。姫の紹介で、真人が現地で輸入の話を取り付けて、大々的に売り出した。でも上手いかなかった。白頭鷲の連中に潰されたんだ」

「白頭鷲？」

「正義面した悪党、とだけ言っておこうか」

祀は右側がぞわりと粟立つのを感じた。聞いてはいけない話だったらしい。やはり前沢は人殺しなのだろう。視線を向けなくても、明瞭な殺気が伝わってきた。

祀は深く追求せず、話を進めることにした。

「組が潰れたから、彗はあんたたちを見捨てたのか」

前沢たちがいた組から祀たちへ乗り換えた。楓という男も彗と一緒にになって前沢たちを見捨てた。そういうことだろう。

前沢からの返答はなかった。沈黙こそが答えだとするのなら、それは肯定と同じことだ。やっぱり彗は悪人でしかなかった。そう判断をつけようとした瞬間、

「それは、解釈の問題だねえ」

困り切ったような口調で、前沢が呟いた。

「どういう意味だよ？」

「助かったんだよ。本当に助けられた。俺さんたちは揃いも揃って真人にイカれてた。真人を渡世の王様にしてやりたいって心底、惚れ込んでた。姫はそれを叶えようとして、わざわざ逃げてきた故郷に帰ってくれたんだ」

唐突に出てきた単語にハツとした。

故郷　　彗が祀のチエロを評した時に使った言葉だ。

「彗の故郷って、どんなところなんだ？」

「酷い場所だつて聞いたよ。紛争地帯でねえ、麻薬で生計を立ててるような場所だそうだ。姫はそこに付け込んで、雪糖を世界中に売り出すよう、あっちのお偉い方を説得して……引き返せなくなった。組が潰れても、慕ってた楓が死んでも、真人を敵に回してでも、雪糖を売らなきゃならない」

「なんでだよ」

「姫が話を持ち出してから、あっちのお偉い方は農地を全部、雪糖の生産地に切り替えたそうだ」

祀は息を呑んだ。学がなくなつて理解できる。農地を全部、麻薬の生産地にすれば自活できない。紛争中の地域が自活できなければ、そこに住み暮らす人間は、

「雪糖を売らなきゃ、数千人の人間が餓死するだろうねえ」

こんなのは反則だ。

咄嗟にそう思った。

そして、それ以上、何も考えられなかった。

ぼんやりと街のネオンが霞んでいる。きっと脳が光を認識できないほど疲れ切っているのだ。今日は色んなことがありすぎた。早く休みたい　そう思っているのに足を止めるのが怖かった。どこかに入って眠るのも怖い。

きっと、考えてしまう。

正しいことや、悪いこと。今まで祀が見てきたものは虚構だったのかもしれない。本当は、正義だと思っていたものが悪だったのかもしれない。それを深く考えるのが怖い。

俯いて、自分の足だけを見つめて歩く。顔を上げたら誰彼構わず殴りつけてしまいそうだ。繁華街を歩く人々は充足した毎日を送っている。多かれ少なかれ、悩みを持っているだろうが、悩むような

選択肢があるだけ、幸せなのだ。

彗には選択肢すら残されていない。

何も考えるなど言い聞かせる。何もできないのだ。無力な自分に憤つても、何一つ変えられない。彗の助けになることなど出来はしない。どんな事情を聞いても、肩を並べて麻薬を売ることが正しいとは思えない。

無心に足を動かす。答えの出ない問いを振り払うように。

そうして辿り着いたのは、昼に立ち寄った公園だった。

「よお。浮かねえツラだな」

何故、この男がこんなところにいるのだろうか？

祀の前に現れたのは郷田だった。

「なんで、いるんだよ」

「散歩がてらに花見ができねえかと思つてな」

嘘ではなさそうだ。郷田はベンチに腰掛けて、煙草を片手にビールを煽つていた。花を目当てにやってきたはいいが、桜が咲いていなかった。けれど構わず、そのまま飲んでいるといったところだろう。花見とはそんなものだ。

祀はベンチから1mほど離れた場所で立ち竦んでいた。

「何か用でもあんのか？」

問われても言葉は出ない。無言で睨みつけていた。

「酒が欲しいのか」

からかうように言ってくる声音が憎らしい。

ふ、と笑う気配がする。

「俺が憎いか？」

知っている。

この男は、祀が前沢から聞かされたことを全て知っている。

「あんたが、全部、悪いんだろ！」

押し込めていた感情が破裂した。祀は拳を握って大声で叫んだ。こんな風に人を憎んだのは初めてだ。殺してやりたいほど憎い。銃があつたら撃っている。

事務所で銃口を向けた時、彗も言っていた。

『俺を撃つの？』

今なら違うと断言できる。全ての元凶は彗じゃない。

郷田が彗を闇の中に引きずり込んだのだ。

「気づくのが遅えなあ」

郷田は鷹揚に言い、組んだ足を解いて前屈みになった。立ち上がって向かってくるのかと思いきや、単に酒が切れただけらしい。足元に置いていたビニール袋から新しい缶を取り出して、プルトップを引いた。既に何本か空けているようだ。縦に潰された空き缶がベッチの上に転がっている。

「で、おめえはどうすんだ」

「どうするって……」

「俺を殴ってみるか？」

缶を傾けて、グビリと喉を鳴らすのが見える。

「まあ、黙って殴られる趣味はねえが」

報復は覚悟しておけ、という意味だろう。挑発するように手招きされたが、まったくもって敵う気がしない。だからといって悔しいわけでもなかった。

不思議な感覚だ。威圧されるというのでもない。あんまりにも堂々としているので敵意が失せた。それだけだ。

「なんだ、俺を恨んでるんじゃないか」

手招きをしていた黒皮の手袋が、膝の上に落ちる。

「残念だ」

短い言葉の中に強い落胆が垣間見えて、祀は戸惑った。

郷田が悪いはずだ。彗が麻薬を売るようになったのは、郷田が渡世で申し上がるためだったと前沢は言っていた。

おそらく郷田もそれを認めている。そして、「残念だ」と言うからには後悔しているのだろう。

それなのに何故、悪びれた態度を取らないのか。取らずに、いられるのか。

「あんたが、悪いはずだ」

誰に向かつて言ったのだろう。自分に言い聞かせたのかもしれない。祀の視線は地面に落ちて、声には力が籠っていないかった。握った拳だけが怒りの余韻を持っている。

「フエイがそう言ったのか？」

ため息交じりの低い声が訊ねた。

祀は答えられなかった。答えられるはずがない。

これは故郷の声だ。

慧が空を見上げて、探し求めていた声なのだ。

慧は自ら望んで、郷田の傍にいる。

「残念だ。おめえもフエイを攫ってやれねえ」

心苦しそうな声が耳に残った。

郷田が立ち去ってから、いつまでも残っていた。

郷田が残していったビールを片手に、祀は考えた。

慧のために、してやれることを必死に考えた。

どうして、これほど慧に捕らわれているのかも考えた。

そうして一つの決断をして、立ち上がった。

「思い知らせてやる」

手始めにビールの空き缶を公園のゴミ箱に投げ入れた。

続いて財布の中から、長らく仕舞い込んでいた実家の鍵を取り出す。それを拳の中に握り締めて、拳をパーカーのポケットに突っ込んだ。

そうして繁華街のネオンの中を突き進む。

まっすぐに、一度も振り返らなかった。

エピローグ**

エピローグ

あれから一ヶ月が過ぎた。

祀は実家へ帰り、恐喝からも足を洗って、片手間にチェロを弾ける職業に就いた。

有楽町の片隅にあるレストラン兼バーのバーテンだ。この店にはステージがあり、クラシックからジャズまで様々な演奏家を抱えている。どうしても働きたい、と面接で土下座して頼み込んだ。「雑用でも何でもやるから働かせて欲しい、何なら給料ゼロでも構わない。チェロが弾きたいのだ」と。

そうして働かせてもらえるようになってから、毎朝、毎晩、泊り込みで、寝る間を惜しんでチェロを弾いた。

「悪くはないな」

努力が認められたということなのか。それとも少しはブランクを埋められたのだろうか。年がら年中、渋い顔をしているマスターの表情からは判断がつかなかったが、ステージでソロを弾かせてもらえることになったのが数日前。

そして、今日がその日である。

出番は10分後だ。祀はバーカウンターのの中から、落ち着きなく店内を見回していた。この店は2階建ての立派な店舗だ。1階の力ウンターからは見えない部分がある。

カウンターから身を乗り出すようにして、2階を見上げていたら、注文を取って帰ってきたウェ이터とぶつかりかけて、慌てて身体を引いた。

「おっと」

「すみません」

「女でも呼んだかあ？」

カラカラと明るい笑い声を立てるウェイターに「そんなんじゃないっすよ」と返して、祀はベストと前掛けを脱いだ。

女じゃない。来なければ来ないで構わない。

祀が招待状を出した相手は彗だ。

と、いつても祀は彗の住んでいる場所を知らない。宛先はネットで調べた東郷会の事務所である。もしかしたら、彗に届くことなく処分されるかもしれない。

けれど、それでも構わない。

これは祀なりのケジメだった。恋に至ることはなく、胸のうちに溜まり続ける想いを昇華させてしまいたかった。

来なければ、キレイさっぱり忘れる。

もしも現れたら 伝えたい言葉がある。

「よし、やるぞ」

ペチリと両頬を叩いて気合を入れた。一世一代の覚悟を決めて弓を握る。ステージの中央に置かれた丸椅子に座って弦の感触を確かめ、ゆっくりと顔を上げた。

サツと視線を走らせた店内に、姿は見えないけれど。

精一杯の想いを込めて、祀は力強くチェロを鳴かせた。

音大時代は事あるごとにステージに立っていた。だが、どれだけ回数をこなしても慣れなかった覚えがある。緊張のあまり、イマイチ力を発揮できなかった。

けれど、今日の演奏は全力を出し切れたように思う。

「休憩、行っていいぞ」

演奏を終えた後、マスターが言ってくれた。評価してくれたということだろう。コンクールやコンテストといった類に興味はないが、それでもやはり演奏家なのだ。人に評価されるのは嬉しい。良い評価であれば尚更だ。

祀は浮かれた気分で店内を一周した。彗の姿を探したのだ。

「……来てねえのかな」

演奏をしている最中に周りを見る余裕はなかった。もしかしたら、演奏を終えた直後に出て行ってしまったのかも、と、諦め悪く考えながら、2階の休憩室に赴き、
「なんだ、これ」

度肝を抜かれた。休憩室の机の上に巨大な薔薇の花束が置かれていたのだ。祀の腕で一抱えにしなければならぬような真紅の花束である。これを抱えて街中を歩けば、注目的になるだろう。どうやって運び込んだのか、従業員の誰かが持ってきたのか、されども近づいて、持ち上げてみて自分宛だと気がついた。

花束の下に茶色い封筒が置いてあった。

封筒の表には小学生が書いたような文字で「迷惑料」と記されており、中身は週刊誌ほどの厚さの札束だった。

「っ、ふざけんなよ！」

祀は茶封筒と薔薇の花束を驚掴みにして廊下走り出た。

1階に降りていては間に合わない。何故だかそう確信して2階の窓から店の前の大通りを覗き込む。

週末の夜の繁華街は結構な人出だったが、すぐに見つけられた。

頭一つ飛びぬけた大男が目印だ。その隣にベージュ色のコートを着た慧の姿がある。

ふと、慧が振り返った。

そして、ニツコリと笑って手を振った。

声なく動いた唇が紡いだ言葉は「さよなら」だ。

これで全部が終わりだなんて冗談じゃない。

「こんなもん、いるかよ！」

祀は手の中の迷惑料を窓から放り投げた。

空中分解した札束と真つ赤な薔薇が夜の街に降り注ぐ。

大通りは騒然となっている。構わずに祀は叫んだ。

「俺は、お前が死んだら泣くからな！ 金なんかなくても、悪いことばっかでも、お前がずっと大事だ！」

これが祀の伝えたい言葉だ。

一人じゃないと思い知らせてやりたい。ここにも身を案ずる人間はいるのだと心に刻み付けてやりたかった。

窓枠を両手で掴んで、声の限りに叫ぶ。

「覚えとけよ！ 忘れんなよ！」

慧はしばらくの間、啞然とした表情で祀を見上げていた。やがて底意地の悪い笑顔を浮かべた郷田に、ぐしゃりと頭を撫でられて我に返ったらしい。

しばらく何やら言い争って、ぷいと顔を背けて人ごみの中に消え去るのが見えた。何を言ったのか、郷田を恨みながら慧の姿を探していたら、バリトンの声が耳を貫いた。

「負け犬の遠吠えはみつともねえぞ」

通行人の注目を浴びても揺らがない。郷田は堂々とした態度で祀の言葉を真っ向から叩き斬った。

「フェイは俺についてきた。それが答えじゃねえか」

ニツと獰猛な顔で笑う郷田に敵はいないらしい。どう見たってヤクザなのに周囲から感嘆の声が漏れた。前沢に惚れ込んだと言わせただけのことはある。郷田はまさに、渡世の王だ。有無を言わさず、人を従える力を持っている。

だが、そんな王様に姫は納得できていないらしい。

バーテン服のポケットに入っていた携帯が震えた。画面を見ると非通知着信の文字がある。通話ボタンを押して、受話器に耳を押し当てると、名乗りもせずには用件を言った。

「恥ずかしいから、やめて」

「だったら、俺の質問に答えろよ」

「それって、脅迫？」

「そうだな」

「懲りないね、祀」

「これで最後だ」

「質問は何？」

「俺の演奏、どうだった？」

薔薇の花束よりも、分厚い札束よりも聞かせて欲しい。

いつも、どれだけ弾いても空を見上げていた。空虚で儚げな表情が心に焼き付いて、いつまで経っても未練が残る。

既に満たされていると知っている。

代わりにならないとも聞かされた。

それなら、せめて思い出を残したい。

「……懐かしい、って思った」

女々しいだろうか、と思った矢先に告げられた。

「俺も覚えてるよ。ずっと、覚えてる」

穏やかな声音に息が詰まる。

人間は、悪いことを忘れる生き物だから。

記憶が鮮やかに甦る。昔、そう言ったのは彗だ。

「祀。覚えててくれて、ありがとう」

最後に一言告げて、電話は一方的に切れた。画面を見てみれば1分にも満たない、短い通話時間だ。

だが今までで一番、濃密な時間だった。

心の中の汚水が白く、淡い花びらに変わっていく。

それはやがて春の空気と混ざって、心の一部に溶け込んだ。

「さてと……どうすっかな、これ」

面接にあたって短く切った後頭部の髪を撫でて、階下に群がる群衆に視線を向ける。一体、いくらあったのだろう？ 我に返って考えてみると少しもつたない気もする。

「いや、それよりもマスターだよな。言い訳、言い訳……」

ブツブツと唱えながら、階下に向かう祀の中に未練はない。

二度と会えなくても構わない。

彗はいつまでも祀の音色を思い出す。

かつてチェロの音に故郷の声を求めたように、今度は故郷の声を聴いて、祀の音色を思い出すのだ。

了
.

エピソード**（後書き）

ご読了、お疲れ様でした。そして、ありがとうございます。
何度も何度も改稿しまして：本当に申し訳ないばかり。
ゼロ弾きの未恋、これにて完結と相成ります。

されども、彗・真人はRed fractionにも顔を出して
おります。

祀も短編などで登場することがあるかもしれません。

未永くお付き合い頂ければ幸いです。

では、失礼致しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3940v/>

セロ弾きの未恋

2011年8月6日12時37分発行